

史跡 武田氏館跡VI

— 武田神社社務所増築・参道石垣改修に伴う主郭部調査 —

2000

武 田 神 社
甲 府 市 教 育 委 員 会

『史跡武田氏館跡VI』正誤表

誤	正
3頁31行目 『史跡武田氏館跡III』 1997	→ 1998
4頁16行目 『史跡武田氏館跡IV』 1998	→ 1999
4頁25行目 『史跡武田氏館跡III』 1997	→ 1998
9頁図4キャプション 深堀1・深堀2	→ 深掘1・深掘2
11頁図5キャプション 深堀1東壁	→ 深掘1東壁
22頁34行目 ピット61	→ ピット25
23頁6行目 99は口縁部のみで	→ 110は口縁部のみで
23頁37行目 93番は削除	
52頁3行目 『武田資料集』	→ 『武田史料集』

序

戦国大名武田氏が躑躅ヶ崎の地に館を築き、新たに甲斐の府中として開創した甲府のまちは、近世に至り甲府城下町として大きく再編されながらも甲斐の政治・文化の中心として今日まで発展してまいりました。しかし歴史ある甲府のまち並みも、戦災と戦後の高度成長がもたらした都市化の波の中で、豊かに育まれてきたまちの個性を喪失しつつあります。また、道路交通網の発達に伴う生活圏の郊外化により、全国的に中心市街地の空洞化が懸念されております。本市もそのような社会情勢の中、甲府城跡を中心とした歴史・文化財を活かした個性的なまちづくりを模索しているところでございます。

本書は、武田神社社務所の儀式之間増築工事に伴う武田氏館跡主郭部の発掘調査と、神社参道の石垣積み替え工事に際した土壘断面調査の成果を記録した報告書でございます。かけがえのない歴史的文化遺産である武田氏館跡の造構破壊を防ぎ、将来的な史跡整備やまちづくりに活用していくため、工事内容や歴史景観の保全をめぐる協議に相当な時間と労力を費やすこととなりましたが、武田神社の深い御理解と御協力を賜り、神社の境内整備と史跡保護の調和をとることができ、感謝の念に堪えません。協議にあたり御指導いただきました文化庁・山梨県教育委員会・史跡武田氏館跡整備活用委員会、及び武田神社氏子総代の皆様方に、先ずもって、御礼申し上げる次第でございます。

調査では、武田氏時代の建物や堀の跡とともに、戦国大名武田氏の生活と文化を偲ばせる生活用品が多數発掘されました。また、参道石垣の解体に伴う土壘断面の調査では、館造営当初の堀が土壘の下部から発見され、その後の数時期にわたる館の改修工事の様子が解明されるなど、全国で行われている戦国大名居館の学術調査のなかでも特筆すべき成果をあげることができました。

武田氏館跡において繰り返された大規模な造成・改修工事を想うとき、華やかな武田氏の活躍を影で支えた民衆の姿が目に浮かんでまいりますが、甲府市教育委員会では、幾多の先人の血と汗の結晶ともいえるこの館跡を全国に誇り得る本格的な史跡公園として保存・整備すべく、整備基本構想・基本計画の策定に取り組んでいるところでございます。今後も発掘調査や史跡整備で関係者各位の御指導・御鞭撻をいただくことと存じますが、引き続きよろしくお願い申し上げます。

平成12年3月

甲府市教育委員会

教育長 金丸 晃

例　　言

1. 本書は山梨県甲府市古府中町2611地内に所在する武田神社社務所の儀式之間増築及び周辺部造構確認に伴う主郭部調査、並びに武田神社参道石垣改修工事に伴う主郭部南土塁発掘調査の報告書である。
2. 本館跡は、昭和13年（1938）国史跡の指定を受け、調査は文化庁・県教育委員会・史跡武田氏館跡調査団の指導の下、甲府市教育委員会が主体となって実施した。調査経費は、建設予定の建物敷地及び参道石垣改修については武田神社が負担し、建設予定地周辺部の造構確認調査に関しては国・県の補助金交付を受けた。
3. 発掘調査は、主郭部を志村憲一・佐々木満・宮永小枝が、主郭部南土塁を佐々木満・富永小枝が担当した。
4. 本書の執筆は佐々木満が行った。
5. 本書にかかる調査地区の実施期間、調査面積は下記の通りである。

主 郭 部	平成10年 7月27日～平成10年11月30日	460m ²
主郭部南土塁	平成10年11月30日～平成11年 1月20日	360m ²
6. 主郭部発掘調査では、株式会社 シン技術コンサルに航空写真測量を委託した。
7. 主郭部南土塁発掘調査では、作図に際して有限会社 東雲測量の協力を得た。
8. 本書の挿図は、栗田かず子・林久美子・藤井武美・中村里恵が作成した。
9. 本書の編集は、市瀬文彬（文化芸術課長）を責任者とし、佐々木満が行った。
10. 本書に係わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏から御指導、御協力を賜った。記して感謝申し上げたい。

文化庁文化財保護部記念物課・山梨県教育委員会学術文化財課・帝京大学山梨文化財研究所・武田神社・地元関係自治会

伊藤正義	磯貝正義	小野正敏	小野正文	北垣聰一郎	清雲俊元
古賀信幸	笹本正治	坂井秀弥	鈴木 稔	鈴木 誠	田代 孝
萩原三雄	橋口定志	畠 大介	原 真	藤澤良祐	前川佳代
増潤 徹	水本和美	宮里 学	室伏 徹	森原明廣	山口博之
山下孝司	八巻與志夫				(敬称省略)

凡　　例

本書に掲載した遺構図・遺物実測図は以下のとおりである。

1. 主郭部調査段階で設定したグリッドは、調査区の形状にあわせて任意設定したが、航空測量による全体図では、国土座標に合わせたものを提示している。
2. 南土壘の調査に関しては、神社石垣解体後の土壘残存面に合わせて調査しているため、観測点などは任意である。
3. 全体図と遺構・遺物実測図の縮尺は、図面上に表示したスケールのとおりである。
4. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示し、単位はmである。また、セクションポイントの表記でE・W・S・Nはそれぞれ東西南北の方角を表している。
5. 遺構・遺物番号は本地區における番号であり、過去、主郭部内において実施された調査の遺構番号とは区別している。
6. 個々のピット・遺物の詳細情報に関しては、観察表を参照していただきたい。
7. 遺構断面上層色調及び遺物観察表中の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997後期)に基づいて記載した。
8. 実測図内のスクリーントーン指示は以下のとおりであるが、部分的に指示を個々の図面上に表示したものもある。



……地　山



……砾層・石



……擾　乱

調査スタッフ

(調査補助員)	内 藤 かおり								
(一般参加者)	雨 金 菜 小 佐 中 平 渡	宮 井 田 宮 出 村 沢 渡	英 いく 代 宏 通 金 孝 則 百合 子	郎 一 子 枝 田 沢 福 渡	菊 格 倉 三 佐 長 福 渡	太 一 勝 製 田 枝 田 沼 渡	郎 一 子 昇 雄 勉 茂	四 美 孝 し の 知 子 邦	郎 苗 男 し の 子 雄
(都留文化大学)	今 手 柿	井 鳴 原	寛 洋 豪	之 平 豪	奥 手 宮	出 塚 内	文 香 美	乃 子 和	大 力 大 力
(東京大学)	英 児 杉 高 深 横 町 内	賀 鳴 浦 橋 町 内	慶 貴 将 大 知 潤	彦 行 史 地 宏 一	大 清 斎 閑 竹 松	水 藤 口 内 本	裕 彰 建 純 大 貴	恵 篠 原 高 根 諸	智 浩 明 史 洋 一
(信州大学)	渥 利 根 川 和 田	美 根 川 和 田	龍 淳 太 子 勉	太 子 勉	大 逸	森 見	英 大	志 悟	嶋 宮 田 沢
(京都橘女子大学)	池 成	夕 子			田 島	都	惠		
(立正大学)	川 道	亨			土 屋	一 木			

目 次

序	
例 言	
凡 例	
調査スタッフ	
目 次	
挿図・挿表目次	

第 1 章 序 説	
第 1 節 遺跡の立地	1
第 2 節 歴史的環境	1
第 3 節 武田氏館跡の概要	3
第 2 章 武田氏館跡第56次調査（社務所儀式之間増築に伴う主郭部調査）	
第 1 節 調査区の概要	
1 調査に至る経緯	6
2 調査の方法	6
3 調査の経過	7
第 2 節 調査の成果	
1 基本層序	10
2 近世・近代造構	10
3 中世造構	12
4 出土遺物	22
第 3 節 小 括	32
第 3 章 武田氏館跡第59次調査（神社参道石垣解体工事に伴う主郭部南土壘調査）	
第 1 節 調査区の概要	
1 調査に至る経緯	35
2 調査の方法	35
3 調査の経過	36
第 2 節 調査の成果	
1 造構の概要	36
2 南土壘東側	37
3 南土壘西側	38
4 出土遺物	39
第 3 節 小 括	41
第 4 章 考 察	
第 1 節 武田氏館跡における土壘の構造と変遷	43
第 2 節 武田氏館跡主郭部の構造と変遷	48

参考資料 第56次調査全体図・第59次調査土壘断面図

挿図目次

図1	武田氏館跡位置図	2
図2	武田氏館跡曲輪配置図	3
図3	武田氏館跡第56次調査区	8
図4	調査区造構番号図	9
図5	調査区基本層序	11
図6	近世・近代造構	15
図7	1~3号柱穴列・1号掘立柱建物跡	16
図8	1号石壙跡・1号堀跡	17
図9	1~4号溝跡	18
図10	ピット(1)	19
図11	ピット(2)	20
図12	出土遺物(1)	24
図13	出土遺物(2)	25
図14	出土遺物(3)	26
図15	出土遺物(4)	27
図16	出土遺物(5)	28
図17	出土遺物(6)	29
図18	造構変遷図	32
図19	第44次調査造構平面図	33
図20	第44次調査1号石壙跡	33
図21	第56次調査1号石壙跡線刻	33
図22	南土壙調査区位置図	37
図23	堀跡推定線	39
図24	土壙西Fゾセクション	40
図25	出土遺物	40
図26	南土壙変遷図	42
図27	中曲輪西上壙	46
図28	中曲輪南土壙	46
図29	西曲輪北側虎口	46
図30	味噌曲輪東土壙	46
図31	味噌曲輪西土壙	47
図32	森將軍塚古墳前方部墳丘石積	47
図33	一乗谷朝倉氏遺跡上城戸土壙石積	47
図34	甲府城跡天守曲輪石積	47
図35	武田氏館跡変遷図	49
図36	年度別調査範囲	53
図37	第56次調査全体図	
図38	土壙東セクション	
図39	土壙西セクション	

挿表目次

表1	ピット一覧表	20
表2	出土遺物観察表	29
表3	出土遺物観察表	42

第1章 序 説

第1節 遺跡の立地

甲府盆地の北端、相川により形成された相川扇状地の開析部、標高334～365mに武田氏館跡は所在する。館の東には積翠寺山から日影山へと連なる竜帝の峰が半島状に突き出している。この出崎はツツジが多く自生していたことから「鄒躉が崎」あるいは「花岡山」と呼ばれ、一般に「鄒躉が崎館」と呼ばれ親しまれている所以は、その麓に館が造営されたことに由来している。

相川扇状地は、三方を山々に囲まれた天然の要害で、東・西縁は南流する藤川・相川の両河川を活かして防御線としている。館の北、扇頂部の積翠寺丸山（要害山）に永正17年（1520）要害城を築城し、大永3年（1523）年には、扇状地南西端の尾根上に湯村山城を築いている。南は愛宕山に隣接した独立丘、一条小山に大永4年（1524）砦を築いている。それまで一条小山には時宗の名刹一蓮寺が営まれていたが、一条小山が城下町防衛の一翼として砦化されたため、寺は山麓の小山原へ移された。

開けた扇状地中央には、館を頂点として南北に5本の基幹街路が開設され、道路沿いに家臣団、寺社、商工人が居住する中世甲府城下町が形成されたと考えられる。南端は現在JR甲府駅付近まで城下町が展開していたと想定され、近年の調査で徐々に商工業者居住地区の実態が解明されつつある。

相川扇状地周辺は、小松庄、一条郷が成立しており、文献では甲府市西部一帯を拠点とした武田有義を祖とする小松氏、甲府市中南部を拠点とした一条忠頼を祖とする一条氏の存在が確認され、その所領であったと考えられる。早くから開発の進んでいた周辺部と比較し、扇央部は水利の関係からも從来開発後進地と推定してきた。平成9年度に実施された西曲輪試掘調査では、北側樹形虎口の下層から酸化鉄粒子を含む灰黄褐色並びに黄褐色土層の堆積が認められ、曲輪造成以前に水田が営まれていたことが確認されている。狭い範囲内における調査であったため、今後議論の余地はあるものの、相川扇状地全体の土地利用の状況把握に一石を投じたことに違ひはない。

第2節 歴史的環境

甲府の創設は、永正16年（1519）武田信虎による石和の川田館（現甲府市川田町）からの移転に始まる。信虎が弱冠14歳にして甲斐守護職を継承した時点では、国内には河内の穴山氏、郡内の小山田氏、西郡の大井氏らの有力国人が割拠し、武田氏の力は決して盤石なものとはいえないかった。武田氏一族においてさえも決して一枚岩ではなく、油川氏のような武田惣領家に対する反抗を続けるものもなお存在していた。信虎は永正5年（1508）に油川氏を破り、翌6年には小山田氏を迎撃して当面の安定を確保したため、守護所であった川田館から、防備に適し、自然災害の少ない鄒躉が崎の地に館を移した。『高白齋記』によると、8月に館の造営に着手し、12月には移転を果たし、その直後には、有力国人衆を新館の周辺に強制的に移住させている。信虎による館の移転に関しては、「守護大名から戦国大名へ脱皮する上で画期的な意義を有する」（磯貝正義『定本武田信玄』）との見解がなされている。

ところが強制的に集住を余儀なくされた有力国人衆の反発は強く、翌年には栗原、大井、逸見（今井）氏らがそれぞれの在所に引き籠ってしまう。信虎は6月から国人衆と対戦し

ており、この様子を『勝山記』は「東郡ノ内ミヤケ塚ニテ軍アリ。上意ノ足衆切勝テ」、「高白斎記」では「今諏訪合戦。是從逸見西郡滅却」と記している。始めに栗原氏との合戦に勝利し、続いて今諏訪（現白根町）に大井、逸見氏らを破って、自らの基盤強化を図ることに成功している。これ以降しばらく、国内における大規模な抵抗は一掃されたものの、翌年、駿河福島勢の侵攻を受けて再び窮地に立たされている。動乱の中で、積翠寺に避難していた夫人は、嫡男太郎（後の信玄）を出産した。武田勢は10月に飯田河原、11月には上条河原で連勝し、内外に武田惣領家の力を誇示するとともに、矛先を甲斐国外に向けることになる。

以降、館は武田勝頼による新府城（現韮崎市）移転までの60年余りの間、武田氏領国の政治、文化の中心として機能していた。武田氏滅亡後も、一条小山の地に甲府城が築城されるまでの間、徳川・豊臣家家臣らによって改修され、再利用されている。



図1 武田氏館跡位置図

第3節 武田氏館跡の概要

武田氏館跡は、堀と土塁で囲まれた2町四方の主郭部を中心として、周囲に付属する曲輪群が展開している(図2)。戦国大名の居館といわれるものの中では、全国でも最大級の規模を誇る。前述のとおり、館の移転は極めて短期間で行われていることから、信虎により築かれた初期の館は方形単郭の主郭部のみと考えられ、周囲の曲輪は徐々に増設されている。以下には今回調査対象とされた主郭部を中心として、各曲輪の概要と調査状況をまとめることとする。

主郭部(東曲輪・中曲輪)

大規模な堀と土塁により区画され、東側を大手口とする。他に隠居曲輪、西曲輪へ通じる虎口が設けられている。大手及び西側虎口は平入りで、北側虎口は大永3年築城の湯村山城などに設けられている外樹形虎口の形態を採用していることから、出入口部に比較的単純かつ初期の形態を残している。主郭部内は、古絵図、古地図などによると、中央を境として館を東西に大きく仕切る石塁が描かれているため、これをもって東曲輪と中曲輪に分けている。平成8年度に実施された中曲輪試掘調査(以下第44次調査)では、実際に絵図に描かれていた石塁跡を検出している。石塁については、加藤光泰領有時代の天正19年から文禄元年に構築されたとする資料がある。館の北西隅には上塁を利用した天守台と呼ばれる野面積みの石垣が残されている。武田滅亡後に築かれたものと理解されているが、構築年代は不明である。

主郭部は過去、山梨県教育委員会により2度、甲府市教育委員会により1度の計3回の調査が実施されている。調査成果については、「甲府市史史料編第1巻」1989及び「史跡武田氏館跡III」1997に所収されている。第44次調査は、甲府市教育委員会として初めて中曲輪を広範囲に調査したもので、土塁の断ち割りも含め、多大な成果を上げている。この調査において、中曲輪南側は現地表下約3mに造構面が存在し、調査区中央を東西方向に走る石塁跡を境として一段高くなる段構造であることを明らかにした。石

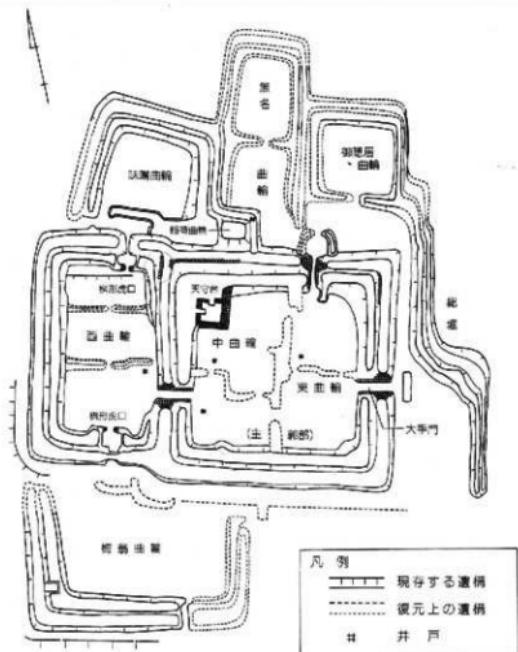


図2 武田氏館跡曲輪配置図

星跡には水溜状造構が伴い、下層からは白い花崗岩と青い頁岩の小石を敷きつめた洲浜状の敷石造構も確認されている。石星跡を挟んで北側では、島を形作るように配された立石群の一部が検出されており、洲浜と合わせて庭園造構と考えられる。土星断面からは、土星の変遷と構築段階での土星内石積を検出している。調査による一連の発見は、これまでの武田氏館像を覆すに充分であり、実態を解明する上で重要な情報を多々提示することとなつた。

西曲輪

『高白齋記』によると、天文20年（1551）武田義信と駿河今川義元の女との婚儀に際して築いたとする曲輪で、東西1町、南北2町の長方形である。主郭部の西に並べて構築されており、土星の規模なども主郭部と同規模である。内部は扇状地の緩斜面を整地した三段の平場から構成され、南北に樹形虎口が構築されている。平成9年度に実施された第50次調査では中段平場と北側樹形虎口が試掘調査され、北側樹形虎口では、虎口に設けられた石積と門礎石との新旧関係などから、樹形虎口の変遷を捉えている。また中段平場と樹形虎口の接点に当たる斜面及び基底部から検出された水田面と空堀の発見は、曲輪の造成過程を知る上で大きな収穫であった。詳細は『史跡武田氏館跡IV』1998を参照されたい。

味噌曲輪

味噌曲輪は、その名称からも味噌蔵のような倉庫的施設を連想させる。西曲輪に北接するため、西曲輪造成後新たに増築された曲輪と考えられ、西山輪から土橋を渡り味噌曲輪内に入ると馬出土塁が残されている。曲輪は地形の規制を受けたためかやや台形で、現状で西側の堀は埋め戻され、宅地化している。平成7～8年度に実施された第41次調査では、掘立柱構造物を中心とする遺構群が検出されている。西土星の断ち割りにおいては、土星内部から門跡と考えられる礎石列の一部を検出し、一時期土星を断ち割って虎口が設けられていたことが新たに明らかになっている。詳細は『史跡武田氏館跡III』1997参照。

稻荷曲輪

館の鎮守御崎社（＝稻荷社）を祀ることを目的として造営された曲輪で、主郭の北側に接するように築かれている。周囲は堀で囲まれ、現状で上塁などは存在していない。調査されていないこともあり、遺構の状況など詳しくは分かっていない。

隠居曲輪

武田信虎が駿河へ追放された後に、大井夫人が居住したとの伝承が残されている。地籍図などから周囲には土星がめぐらされていたと想定される。第18次調査において曲輪内は調査されているが、後世の開発で遺構の保存状況は悪く、僅かに配石の水路や石列などを検出している。

無名曲輪

味噌曲輪と隠居曲輪の間で、堀と土星により区画されている。「浅野文庫」所蔵の絵図に土星で囲まれた不整形の曲輪として描かれている。未調査で実態は把握されていないのが現状であり、本来曲輪として機能していたかどうかとも不明である。

梅翁曲輪

西曲輪の南に接し、東西2町、南北1町規模の曲輪である。東西と南は堀と土星で囲ま

れ、西と南に虎口が設けられている。特に西側虎口部は現状でも周囲に比べ一段低く、小規模な桟形虎口を形成している。梅翁曲輪は、史跡の中で最も宅地化の進んだ地区であるため、武田通りに面する東側の堀は埋め戻されその姿はない。恵林寺所蔵の「甲州古城勝頼以前図」には、武田家滅亡後に入国した徳川氏家臣、平岩親吉によって築かれた旨の記載がある。過去数度、史跡現状変更に伴う発掘調査を実施しており、調査成果については『史跡武田氏館跡I』1986並びに『史跡武田氏館跡V』2000に所収されている。

曲輪群の中には、文献などにより建設時期の明らかなものも存在する一方、無名曲輪のような存在自体不明瞭な曲輪もある。構築順序を整理すると、主郭部（1519）→稲荷曲輪→隱居曲輪（1541以降）→西曲輪（1551）→味噌曲輪（1551以降）→無名曲輪→梅翁曲輪（1582以降）となる。この流れはあくまで文献などに即した変遷であり、曲輪の変遷を考古学的手法で検討するには未だ調査も不十分で立証は困難である。地上で確認できる遺構では、虎口の形態は一つの目安となる。戦時において最も重要な攻防線となる虎口は、館や城を築くに当たりその家々の最新技術を取り入れて構築されている。よって、虎口の構造と変遷に曲輪の位置づけを加味することで、構築順を想定できないものだろうか。以下に虎口形態を整理してみる。

主郭部一東西：平入り・北：外桟形虎口、内にL字状の折れ（内側は後に付け足しか？）

西曲輪一東：平入り（主郭接続部）、南北：内桟形虎口

味噌曲輪一西：平入りか？・東：無名曲輪側に踊場を設け、桟形を形成

隱居曲輪一平入り

梅翁曲輪一西：内桟形虎口・南：内にL字状の折れ

結果として、明確な時期差は反映されていないものの、西曲輪以前のものは、基本的に単純な虎口形態をとっているように見える。西曲輪以降になると積極的に桟形が使用されるようである。味噌曲輪の場合、倉庫的な空間であったと仮定すれば、虎口形態の違いも理解できないだろうか。味噌曲輪を除けば、概ね新旧に分けられ、文献で整理した順序と同じような順序になる。

また、館の構造を考える上で、東縁を囲む総堀の構築年代も大きな問題である。現況で確認する限りでは、堀は大手南側で姿を消しているため、構築時期や規模に関しては調査検討が必要であろう。武田氏館は、確認される限りにおいて、大手が南に大きく開けている。各曲輪の虎口構造がより複雑化していくのに対し、本来館の中で最も注意を払うべき大手口の構造は、平入り虎口と馬出上塁のみであるため、今後総堀の役割も含め、大手口空間の構造究明が課題である。

第2章 武田氏館跡第56次調査(社務所儀式之間増築工事) に伴う主郭部調査

第1節 調査区の概要

1 調査に至る経緯

武田氏館跡主郭部に鎮座する武田神社を訪れる参詣者は、年々増加の傾向にある。参詣者の増加は、大正8年創建以来の建物の中で主に儀式の場として使用されてきた拝殿の収容力を遥かに凌駕し、祭典など大きな儀式に際して参詣者に不便をかけ始めた。また、社務所における来客者の収容も手狭となつたため、平成8年8月段階で、甲府市教育委員会に儀式殿建設を目的とした、社務所の儀式之間増築と老朽化していた神饌所の全面改築工事に関する相談がなされた。神社境内地は史跡武田氏館跡主郭部であり、平成6年度に住民の合意で策定された、史跡武田氏館跡保存管理計画(条文は「史跡武田氏館跡III」所収)の主旨の中でも最重要地区に位置づけられていることから慎重な対応が求められた。神社側で提示された当初計画では、社務所儀式之間増築と神饌所の全面改築分を含めた儀式殿建設面積は大きく、保存管理基準との整合性や、史跡景観への影響が懸念された。市教育委員会では文化庁、山梨県教育委員会と協議を行うとともに、史跡武田氏館跡整備活用委員会などの席で武田神社境内整備と史跡保護について意見交換を重ねた。その結果、神社側でも保存管理基準を遵守し、基準に即した建物構造と建築面積への設計変更を行い、事前の発掘調査と調査後の史跡保護を図ることで合意に至った。その際には、建物建設予定地周辺の史跡整備面からみた確認調査も合わせて実施することを申し合せた。

2 調査の方法

発掘調査に至るまでの経緯は前述のとおりであり、調査方法に関しては史跡武田氏館跡調査團と協議の上、史跡武田氏館跡整備活用委員会の場で承認を得ている。調査区は、建物敷地面積及び周辺部確認調査を含めた460m²を対象とした。調査区は主郭部中心に位置するため、慎重な判断が要求された。調査に先立つて既存の社務所、拝殿間を結ぶ回廊と神饌所の取り壇しが行われ、地下に埋設してあった回廊支柱の引き抜き及び周辺樹木の伐採、伐根に立ち会い、地下の状況把握に努めた。その結果、北側は地表下約30cm程度で黄褐色の地表面を確認し、南側でも約40cm~50cmの範囲で遺構確認面を捉えた。北から南への緩い傾斜が確認されたことにより、小型重機を入れ、確認面より若干高めに残しながら表土剥ぎを行い、以下の層は人力により掘削している。

発掘調査段階では国土座標に合わせず、調査区の形に合わせて4m単位のグリッドを設定し、図化・遺物取り上げを行っている。最終的に航空写真測量により国土座標に合わせた全体図を提示した。

調査当初、グリッド間を東西南北に土層確認のためベルトで結んでいたが、調査の進行に伴い包含層の多くは近代に削平されていることが判明した段階で、すべて取り去っている。遺構については、個々に半載を行い、溝状遺構のような規模の大きなものに関しては、適宜にベルトを設けた。また、掘削段階で判明していた柱穴列については、エレベーション図を添付している。出土遺物は、基本的にグリッド、遺構単位で取り上げを行い、必要に応じて出土位置の記録化を行っている。

埋め戻しは約15~20cm程度の厚さで砂を敷きつめている。完掘したものには上蓋や砂を充填している。建設工事が伴うため、調査で排出された残土は元に戻さず、砂の上には碎石などで埋め戻しが行われた。

3 調査の経過

7月27日	調査区設定及び人力による試掘坑掘削開始。	10月13日	ピット16及び1号土坑を掘削。
7月28日	重機による建物基礎コンクリート及び切り株の除去。小型重機であったため、予想以上に除去難行。	10月14日	帝京大学山梨文化財研究所 畠 大介氏来訪。
7月31日	山梨県埋蔵文化財センター 田代指導官、李映福氏来訪。	10月15日	石塁跡石列以南を掘削。
8月5日	重機による表土除去開始。隨時精査遺構確認。	10月20日	ピット40~42を掘削。1号石積・1号石列を検出。
8月6日	甲府市内の小学生発掘体験。	10月26日	ピット46及び1・4号溝、石塁跡南側の堀跡を掘削。
8月7日	武田氏館跡調査団委員笛本正治氏視察。	10月27日	ピット43~50を掘削。
8月11日	重機による表土掘削終了。全体精査。芝学園中高生来訪。	10月28日	ピット51・52を掘削。
8月13日	調査区杭打ち	10月29日	1号石列盛土除去。暗渠検出。
8月18日	1号石列、1号石積確認。	10月31日	調査地区的現地説明会開催。60名が参加。
8月19日	武田氏館跡調査団委員小野正敏氏視察。	11月2日	石塁跡及び堀跡検出。
8月21日	1号敷石状遺構確認。	11月6日	調査区北壁へ地山確認のためのサブトレンチを掘削。
9月1日	1号敷石状遺構検出。	11月10日	調査区中央攪乱部へ地山確認のための深掘りを行う。これによって、遺構確認面が既に地山であることを再度確認。
9月3日	史跡武田氏館跡調査団による現地視察。	11月16日	ピット53~55を掘削。
9月9日	山口市教育委員会古賀信幸氏来訪。	11月17日	ピット56及び3号溝を掘削。
9月11日	ピット1~4を掘削。	11月18日	ピット57~59を掘削。
9月14日	ピット5掘削。	11月19日	ピット60~62を掘削。シン技術コンサルのラジコンヘリによる航空写真測量を実施。
9月16日	明け方に台風が通過し現場水没。武田氏館跡の堀の水が溢れ、西曲輪へ通じる土橋も一時水が浸く。以後10月初旬まで雨の日が続く。	11月25日~30日	まで埋め戻し作業を行い調査を終了する。
9月17日	ピット6・7を掘削。		
9月25日	ピット11~15・18を掘削。		
9月29日	ピット8~10掘削。石塁裏込め部分の確認開始。		
9月30日	ピット19~24を掘削。		
10月5日	ピット16・17・21~24を掘削。		
10月6日	ピット25・26を掘削。		
10月7日	ピット27・28を掘削。		
10月8日	ピット29~35及び2号溝を掘削。		
10月9日	ピット36~39を掘削。		



写真1 調査参加者

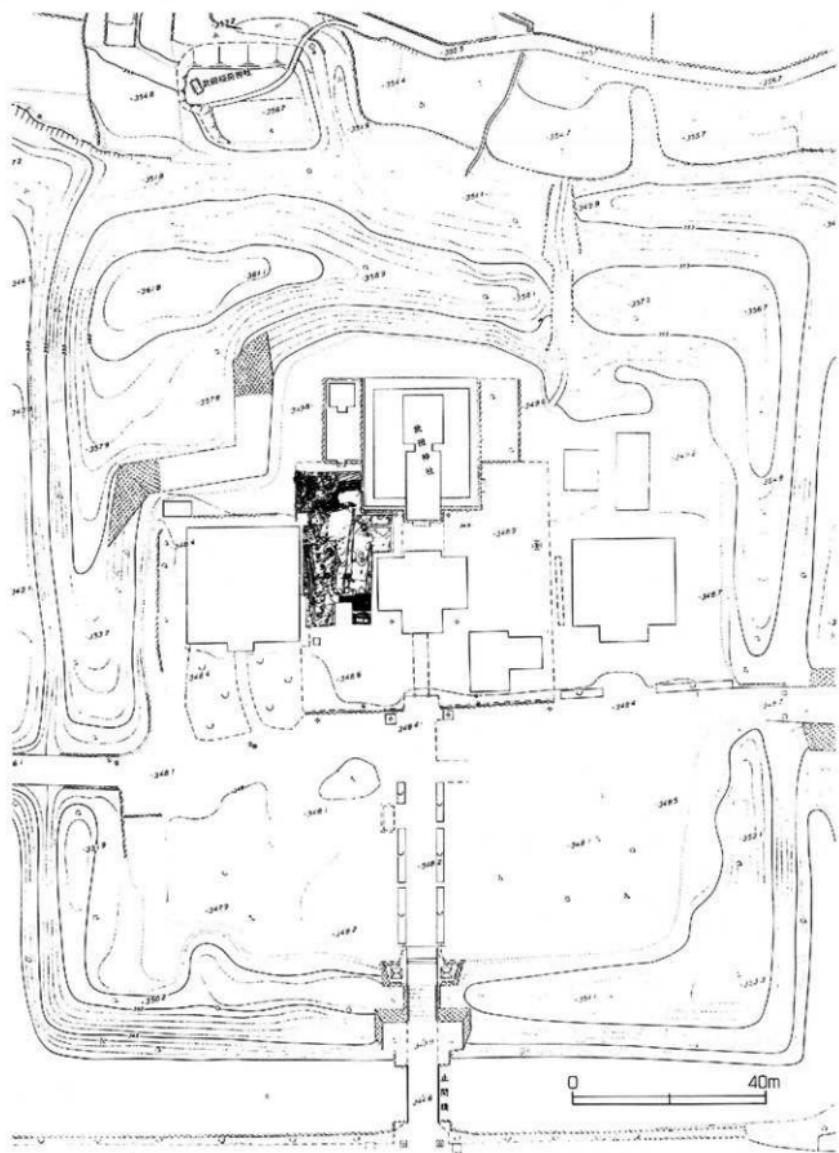


図3 武田氏館跡第56次調査区

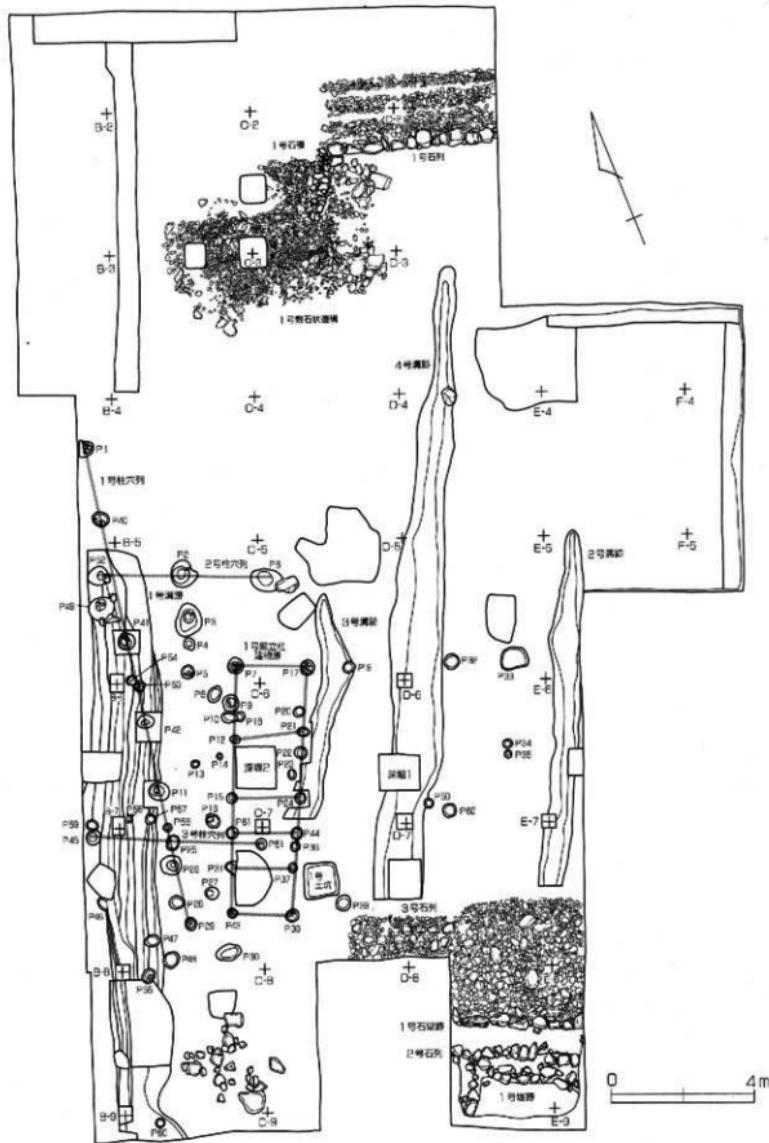


図4 調査区遺構番号

第2節 調査の成果

本調査区は中曲輪北西、土塁の隅を利用して築かれた野面積みの天守台南東に位置する。天守台自体は正確な構築年代は不明であるものの、石垣の構築技術から武田氏滅亡後に築かれた石垣であるとされている。石垣南東隅は基底部付近まで崩落しており、岩国城などに見られる破城の作法によるものとも考えられる。

調査に際しては、天守台に隣接する当該地区からは天守台に関連する遺構群、ないしは武田氏時代の中心建物群の一角が発見されるのではないかとの期待が持たれた。調査範囲は、神饌所跡地及び社務所と拝殿に挟まれた空閑地であり、いくつかの植栽はあったものの、遺構の残存状況も良いのではないかと思われた。しかし、実際は大部分が神社創建時に削平を受け、遺構の残存状況はきわめて悪く、調査区中央から北側にかけての広い範囲で、中世遺構は1基も確認できなかった。

調査区は南北に長く、東側は拝殿と本殿の間の空閑地部分が張り出す形で設定した。調査用のグリッドは4m間隔で木杭を打ち、調査区の形に合わせて任意に設定した。グリッドの名称は、東西軸をA～Fまでのアルファベット、南北軸を1～9までの数字とした組み合わせで呼称した。

1 基本層序（図5）

全体的に削平を受け、調査区北側では表土から地山まで約30～40cm程度である。その間はすべて近代の盛土が覆っている。南側は盛土ではなく拳大ほどの礫で埋め立てられており、状的には平成8年度試掘調査の際の埋め立てとまったく同じであった。こうした盛土、礫による埋土を除去すると、調査区中央から北側にかけては直接黄褐色の地山面に達する。遺構は地山面直上で敷石状遺構や石列を有する基壇状遺構などを検出しているが、時期的には出土遺物からみて近世・近代であるため、調査区中央より北側では、中世の遺物包含層及び生活面の多くは既に失われた形となっている。

反対に南側では、部分的に炭化物を多く含んだ中世以降と考えられる暗褐色土や中世の包含層と思われる黒褐色土上の堆積が確認されている。また、調査区中央より南西の一角には、自然堆積による均質の黒褐色土が地山面上に堆積していた。おそらく、武田氏が館を造成する以前の古期堆積層であると考えられる。したがって、地形的には調査区中央付近から南西方向に緩く傾斜していたものと考えられ、南へ行くほど遺構も削平を逃れ、比較的密に確認されたといえる。

2 近世・近代遺構

遺構検出面は地山直上で、調査区北側で検出された1号石列及び1号石積、1号敷石状遺構が該当する。また1号石列は裏側に3条の暗渠を伴っている。そのため、暗渠については1号石列に含め報告する。

1号石列・1号石積（図6・写真5・6）

調査区北側C-2・D-2区で検出され、1号石列は、調査区外東側まで延びている。調査区内では東西5mの幅で一列に検出され、石は50～60cm前後のやや青味がかった安山岩のみを用いている。石材は地山の石ではなく、河原石をわざわざ運んできていると考えられる。石に加工痕はなく、一か所だけ石を割って破片を石と石の間に詰めているものが確認されている。裏込は小石を少量伴うとともに、3列の暗渠を検出している。暗渠は10cm前後の安山岩と青色頁岩の小石を充填している。

1号石積は南北約2mほどの範囲で2段程度積まれ、1号石列よりも一回り小振りの石

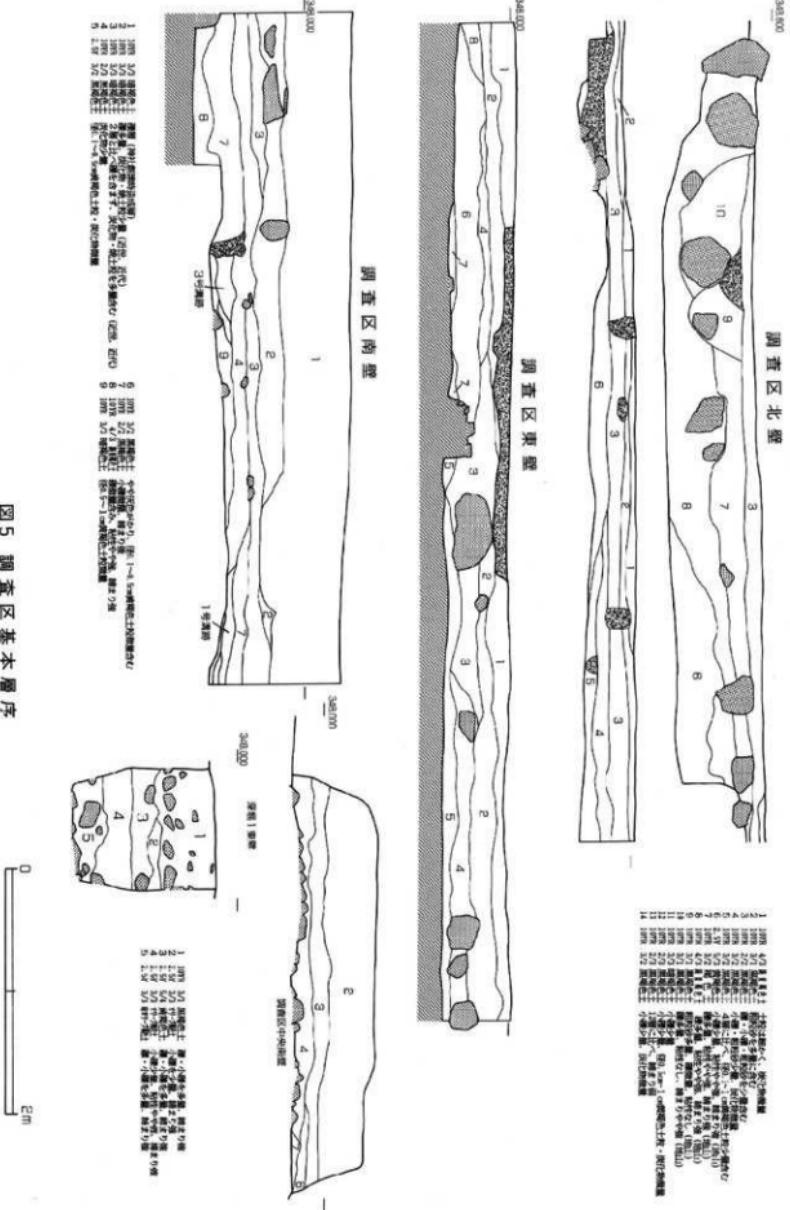


図5 調査区基本層序

を用いて構築している。石材は安山岩質で、表面の粗い石を用いて築かれており、明らかに1号石列のものとは質が異なる。石も割り石を用い、ノミの加工痕も残されていた。

1号石列と1号石積は、技法的に1号石積が後から付け足されたと考えられるが、一体で建物基壇を形成していたと考えられる。1号石列裏込から3列の小石を詰め込んだ暗渠が検出されたことがそれを裏付けている。

出土遺物：かわらけ、瀬戸小甕、瓦平焼（淡路焼）蓮華（図12）

時 期：近世～近代

1号敷石状遺構（図6・写真7）

B-2・3、C-2・3区に跨がって検出されている。一部神饌所基礎により失われているものの、5～10cm前後の小石が全体に敷きつめられ、石材には安山岩、青色の頁岩、白色の花崗岩などが用いられている。当初石の組成と検出状況から、庭園遺構の一部ではないかと考えられたが、調査を進める中で、1号石列や1号石積との関係や、敷石面直上から出土した遺物から、時期的に建物基壇の一部ないしは、付属する何らかの施設と位置づけた。

出土遺物：かわらけ、瀬戸美濃播鉢（図12）

時 期：近世～近代

3 中世遺構

検出された遺構は、僅かに残されていた自然堆積層上で確認されているものもあるが、多くは地山面で確認されている。ピットは62基検出された内、並びから1～3号柱穴列、1号掘立柱建物跡を確認している。また調査区南側で1号石疊跡、1号堀、2・3号石列を、中央付近で1～4号溝跡、1号土坑を検出している。

1号柱穴列（図7・写真10）

調査区の西側で南北方向にピット1・11・26・29・40・41・42の計7基のピットが連なる。一番北に位置するピット1は神社社務所の側溝掘方に削平され、東側の一部分のみが確認された。全長は確認された範囲で約13.60mで、方位はN-8°-Eである。ピットの間隔は場所によって異なるが、平均すると約2.30m程度になる。性格は柵列ないしは塙のような構造物と考えられる。

重複関係：1号溝跡を切る。2・3号柱穴列と重複するが、前後関係は不明。

出土遺物：ピット26などから、かわらけが4点出土している。（図12）

時 期：16世紀（武田氏段階）

2号柱穴列（図7・写真11）

調査区中央で検出され、東西方向に同規模のピット2・6・56が3基並ぶ。全長は4.80mで、ピットの間隔は2.35m前後を測る。主軸方位はN-67°-Wで、遺構は調査区外の西へ広がる可能性が高い。遺構は1号柱穴列同様柵か塙であると考えられる。ただし、後述する3号柱穴列と距離はあるものの、方向的に近似した主軸であるため、一対の構造物である可能性も指摘しておく。

重複関係：1号溝跡を切る。1号柱穴列と重複するが、前後関係は不明。

出土遺物：ピット6よりかわらけ2点が出土。1点は全形が実測可能であった。（図12）

時 期：16世紀（武田氏段階）

3号柱穴列（図7・写真12）

調査区東西方向グリッド7ライン南で検出されている。ピット25・45・51の3基のピットで構成され、全長は4.70m、ピットの間隔は2.35m前後を測る。主軸方位はN-65°-Wであり、2号柱穴列同様、遺構は調査区外西へ展開する可能性が高い。2号柱穴列とは柱穴の規模や出土かわらけの様相が若干異なるため現段階では別の遺構としたが、対応関係は注意しなければならない。

重複関係：1号溝跡を切る。1号柱穴列及び1号掘立柱建物跡と重複するが、1号掘立柱建物跡を切る可能性がある。

出土遺物：ピット25から3枚のかわらけが出土。小形のかわらけは口縁部に特徴あり。（図12）
時 期：16世紀中葉以降か（武田氏段階）

1号掘立柱建物跡（図7・写真9）

調査区中央で検出され、ピット7・12・15・17・21・24・31・37・38・43・44・61の計12基で構成される。主軸方位はN-23°-Eを測り、桁行4間（7m）梁行1間（北側2m、南側1.8m）の南北棟の掘立柱建物である。南側はやや柱間が狭くなり、建物構造としてはやや歪む。桁行柱間は1.9m前後であり、北から3間目には半間で柱穴が検出されている。建物としては規模も小さく、広がりもないため、用途は不明である。

重複関係：3号溝跡を切る。3号柱穴列に切られる可能性がある。

出土遺物：ピット44よりかわらけ2点、ピット61よりかわらけ4点及び瀬戸美濃の窯窓期後IV期新段階の捕鉢、大窓1段階の灰釉端反皿各1点。（図12）
時 期：16世紀前半（武田氏段階）

1号石壙跡・2号石列（図8・写真16～18）

調査当初は遺構確認面において、D7～8・E7～8グリッドを中心に5～30cm前後の礫群が集中的に検出された。中でもD8・E8グリッド内で周囲と比べ、一回り大きな石が東西方向で列をなしていることが判明したため、石列の面を慎重に確認した後、南側の礫を除去した。石列は一列のみ検出され、基底部から南側に約60cm幅で犬走り状の通路と2号石列を検出している。検出状況から判断して、石列北側に展開する礫群は裏込と考えられ、2号石列により保護された通路と合せて石壙跡と考えられる。石壙跡は調査区外へ広がることが確認されており、検出された遺構規模は、石壙跡本体が東西約3.6m、南北約3.5mであり、南北は2号石列まで含めた総全長は約4.4mである。石材は近隣で産出する安山岩系の石を用いている。

石壙跡を構成する石材の中には、1石のみ不明瞭ながら線刻が残されているものが確認されている。線は左右から10数本の斜線が引かれ、最後に縦線を入れている。描かれた線刻の意味は不明であるが、武田氏館跡で初の発見である。

重複関係：3号石列、2・4号溝跡を切る。

出土遺物：かわらけ、青花皿1点、青花碗1点。（図12）
時 期：16世紀末（徳川・加藤氏段階）

1号堀跡（図8・写真19・23）

2号石列から南へ地山を掘り込み、石壙と一体で付設された堀跡である。規模は不明であるが、西側は調査区内で立ち上がりが検出されているため、遺構は南・東へ展開していることが判明している。土層の堆積状況から判断して、完全な水堀ではなく雨水や地山からの湧水により當時湿った状態にあった堀跡であると考えられる。掘削時には遺存率の高

いかわらけが比較的まとまって出土している。かわらけはやや薄手で胎上もやや粗いものがほとんどであった。

重複関係：なし。（石墨とセット）

出土遺物：かわらけ及び白磁碗1点、青花端反皿1点、青花碗1点、槍先1点。（図13）

時 期：16世紀末（徳川・加藤氏段階）

3号石列（図8・写真21・22）

1号石壙跡の裏込内から部分的に検出されている。石は小振りなものを用い、裏込は伴わない。場所により小礫を積み重ねるところも見られ、数段積まれていた可能性もある。主軸方位はN-67°-Wで東側は調査区外に伸びている。3号石列の検出状況から、1号石壙は3号石列を破壊することなく区画をそのまま踏襲して築かれたと考えられる。

重複関係：1号石壙跡に切られる。

出土遺物：青磁1点・白磁1点・鉛釉皿1点。（図14）

時 期：16世紀（武田氏段階）

1号溝跡（図9・写真13）

調査区西壁際より検出されているが、社務所側溝により造構東側は削平され、南側も切り株により大きく搅乱されている。方位はN-25°-Eで南北方向に展開し、長軸は確認範囲で約16.5m、最大幅約2mである。造構は北から南へ傾斜しており、北側は削平されて途中で途切れた状態で検出された。溝跡は底面に薄く砂層の堆積が確認され、3~4段程度の細かな段差が生じている。水は當時流れていたものではなく、降雨時に雨水などが流れる程度のものと推測され、何度も掘り直しが行われた可能性が考えられる。

重複関係：ビット54・58を切り、ビット11・41・42・45・46・47・48・49・52・53・55・57・59・60に切られる。

出土遺物：かわらけ9点、土器火鉢1点、土器擂鉢1点。（図14）

時 期：16世紀

2号溝跡（図9・写真14）

調査区東壁際から検出され、1号溝跡同様南北に主軸を有す。造構は北から南へ傾斜しており、北側は削平を受け途中で途切れる状況であり、南側は石壁に切られている。検出された範囲で長軸は約10m、最大幅は約80cmであり、主軸方位はN-27°-Eである。

重複関係：1号石壙跡に切られる。

出土遺物：かわらけ2点、土器擂鉢1点。（図14）

時 期：16世紀

3号溝跡（図9）

調査区中央から南北方向で検出されている。造構は北から南へ傾斜しており、北側は切り株などで搅乱されていた。南側は包含層上で確認困難であったことと、ビットの重複のため、掘削は行っていない。検出された範囲で南北軸で約5.2m、最大幅約70cmであり、主軸方位はN-27°-Eである。1号溝跡同様薄い砂層の堆積が確認されていることから、降雨の時に雨水などが流れる程度の流水があったものと考えられる。

重複関係：ビット19・21・23・24・36・37・44・51に切られる。

出土遺物：なし。

時 期：16世紀か

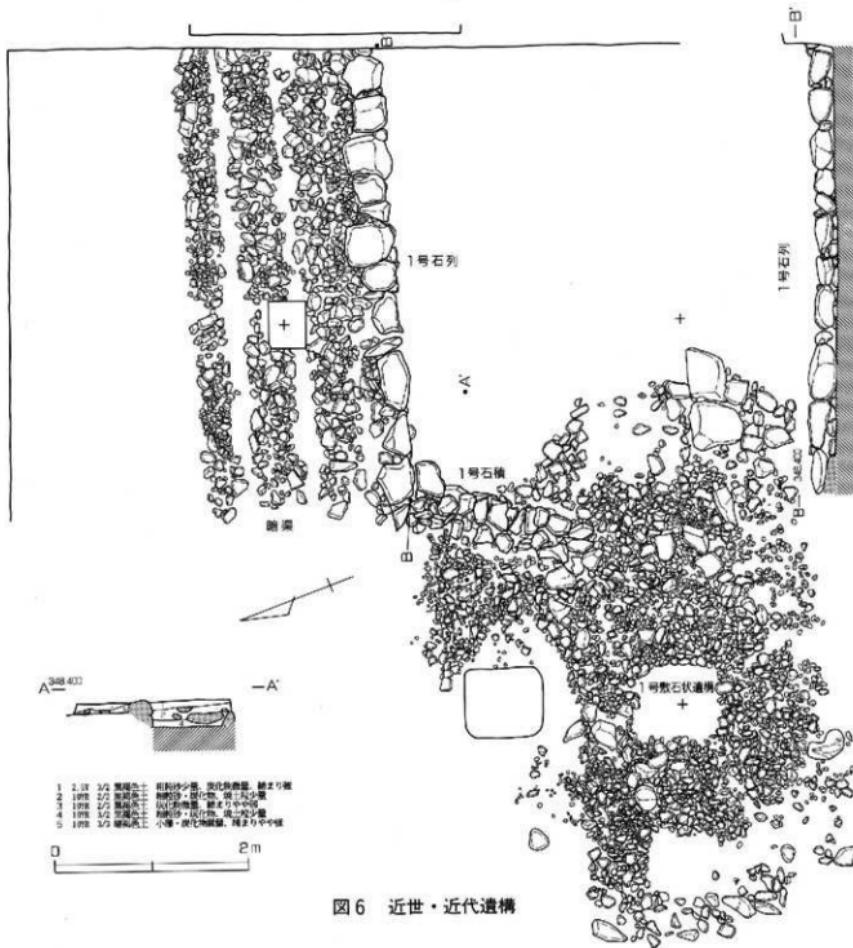
4号溝跡（図9・写真15）

2号溝跡と3号溝跡の間で同一軸で検出されている。溝跡は北側はやはり削平を受け途切れているが、南側は部分的に擾乱を受けたものの、比較的検出状況は良好であった。遺構の最下層には砂層が薄く堆積していたため、降雨時の雨水程度の流水があったものと考えられる。溝跡は検出された範囲で南北約17.6m、最大幅約1.5mを測る。

重複関係：ビット50、1号石塁跡、3号石列に切られる。

出土遺物：かわらけ1点、瓦質擂鉢1点出土。（図14）

時期：16世紀



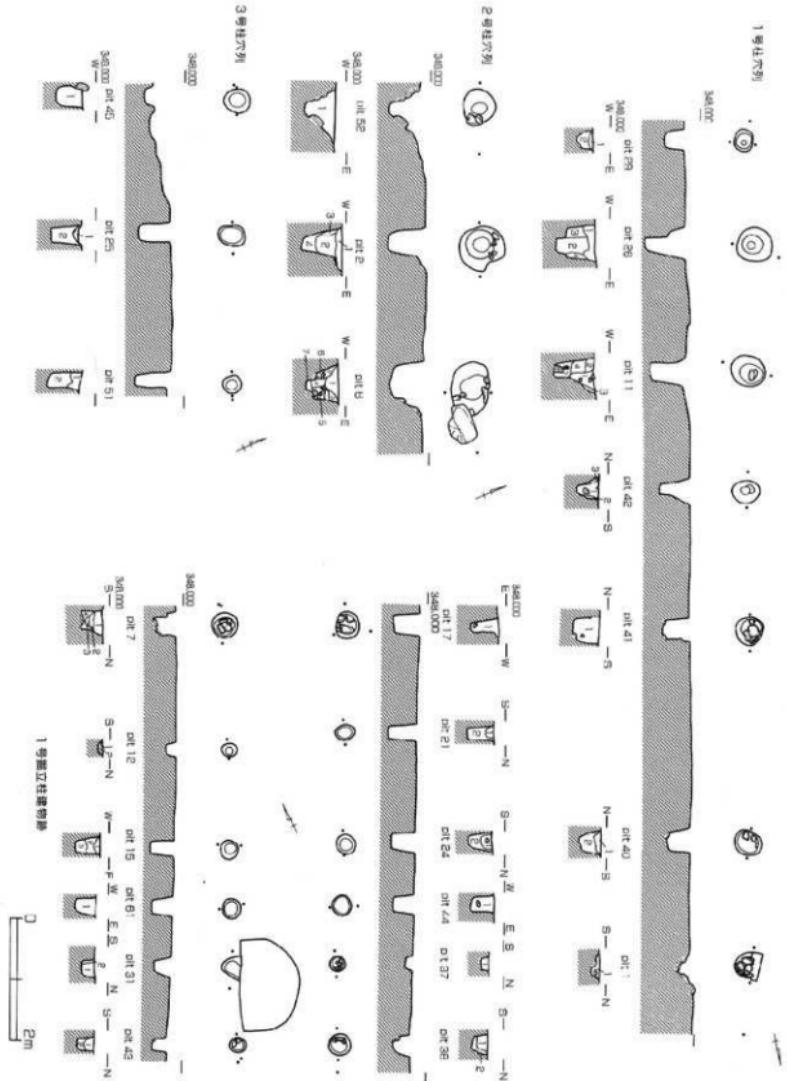


図7 1-3号柱穴列・1号獨立柱建物跡

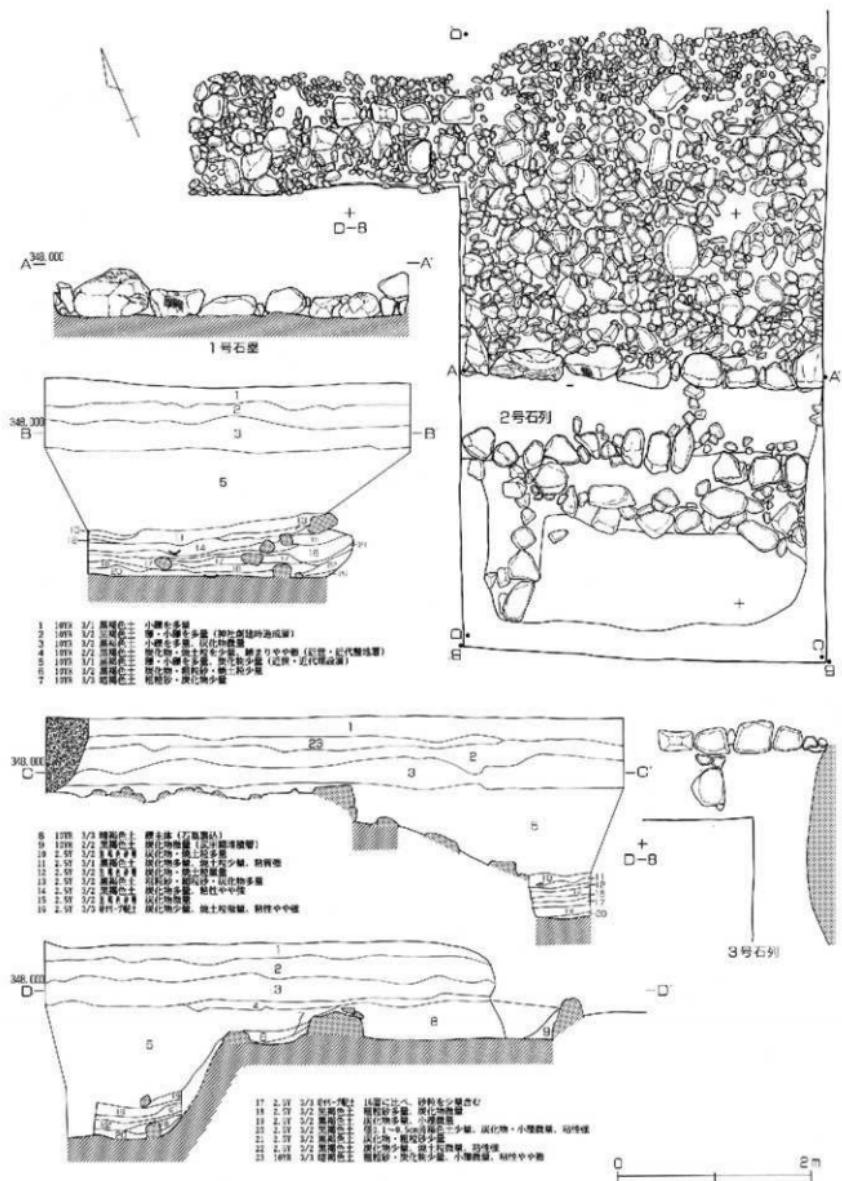


図8 1号石壙跡・1号堀跡

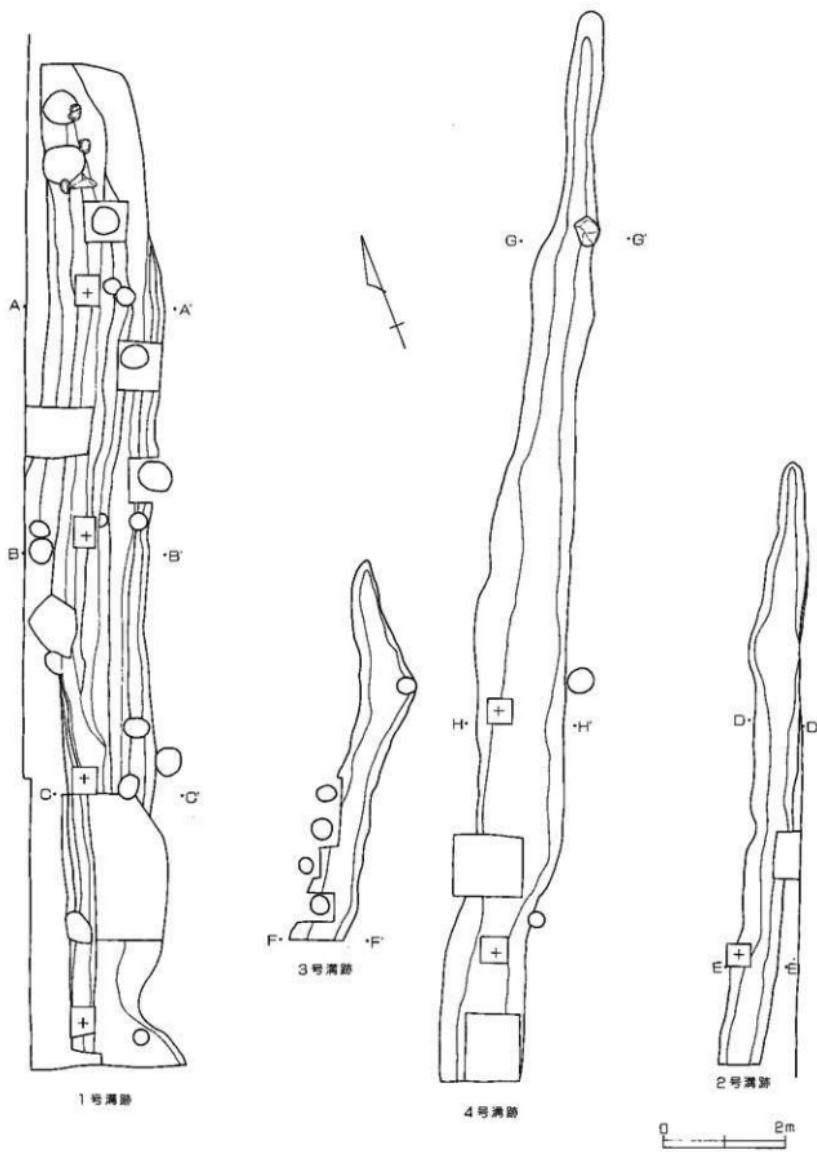


図9 1~4号溝跡

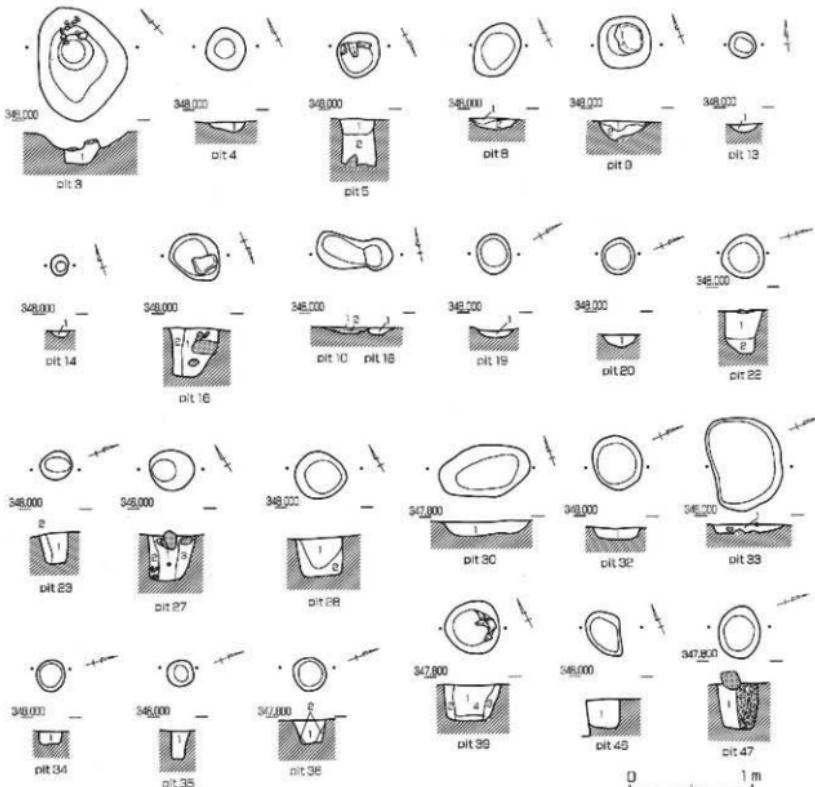
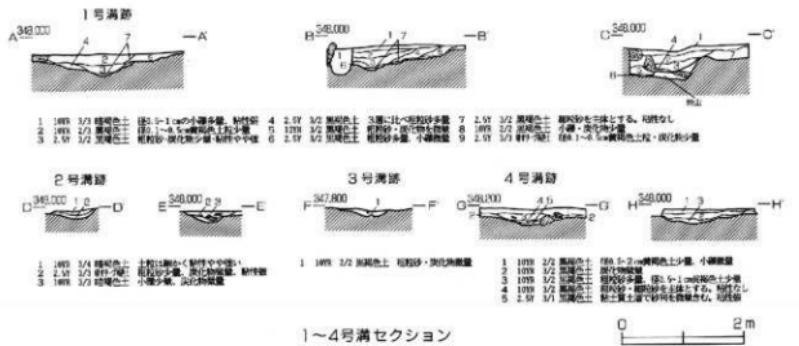


図10 ピット(1)

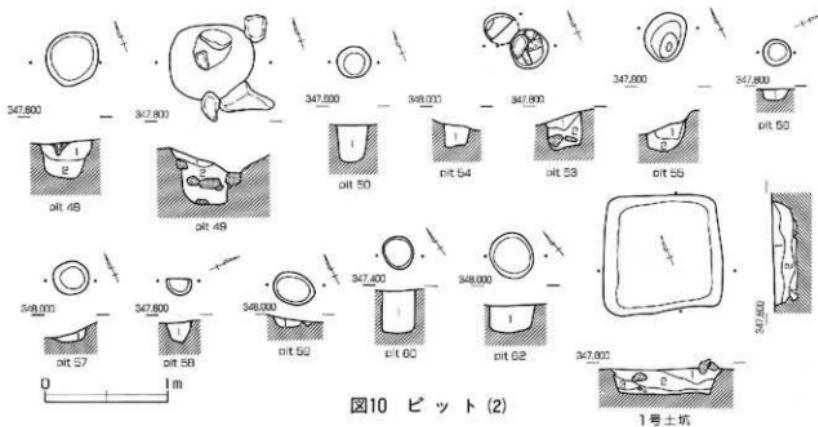


図10 ピット(2)

1号土坑

表1 ピット一覧表

(単位はセンチメートル)

遺構番号	平面形態	長軸	短軸	深さ	土 層	備 考
1	(円形)	21	—	7	1層10YR黒褐2/2	
2	不整楕円形	37	30	33	1層・2層・3層2.5YR黒褐3/2・4層2.5YR黒褐3/1	
3	不整楕円形	95	72	26	1層10YR黒褐3/2	
4	不整楕円形	35	32	8	1層10YR黒褐3/2	
5	不整楕円形	39	36	39	1層10YR黒褐3/2	
6	不整楕円形	44	31	27	1層10YR黒褐3/2・2層10YR暗褐3/3・3層2.5YR黒褐3/1 4層7.5YR暗褐3/3・5層・6層・7層10YR黒褐3/2	かわらけ1点出土
7	円形	21	21	18	1層10YR黒褐2/2・2層10YR黒褐3/2 3層・4層10YR黒褐2/2	
8	楕円形	47	35	9	1層10YR黒褐3/1・2層10YR黒褐2/2	かわらけ1点出土
9	略円形	46	43	16	1層10YR黒褐3/2・2層10YR黒褐2/3	
10	(不整楕円形)	42	26	5	1層・2層10YR黒褐2/2	ピット18と重複
11	楕円形	29	25	33	1層10YR黒褐2/2・2層10YR純い黄褐4/3 3層10YR黒2/1・4層10YR暗褐3/3・5層10YR黒褐2/2	
12	不整円形	13	11	4	1層2.5YR暗赤褐2/3・2層7.5YR黒褐2/2	
13	円形	22	22	7	1層10YR暗褐3/3	
14	楕円形	17	14	5	1層10YR暗褐3/3	
15	略円形	16	15	20	1層10YR黒褐3/2・2層10YR黒褐2/2・3層10YR黒褐3/2	
16	不整楕円形	44	35	40	1層10YR黒褐2/2・2層10YR黒褐3/3	
17	不整円形	23	19	23	1層10YR暗褐3/3	
18	(略円形)	26	19	6	1層10YR黒褐2/3	ピット10と重複
19	楕円形	33	27	6	1層7.5YR黒褐3/1	
20	楕円形	30	27	11	1層10YR黒褐3/2	
21	楕円形	16	13	22	1層10YR黒褐3/2・2層10YR黒褐2/2	
22	略円形	35	34	35	1層10YR暗褐3/3・2層10YR黒褐2/2	かわらけ1点出土
23	略円形	25	23	25	1層10YR暗褐3/3・2層10YR黒褐2/3	
24	略円形	17	16	19	1層10YR黒褐3/2・2層10YR暗褐3/3	

ピット一覧表

(単位はセンチメートル)

遺構番号	平面形態	長軸	短軸	深さ	土層	備考
25	不整梢円形	23	16	23	1層10YR黒褐2/2・2層10YR黒褐3/2	かわらけ3点出土
26	略円形	29	28	32	1層10YR暗褐3/4・2層10YR黒褐3/2 3層10YR暗褐3/3・4層10YR暗褐3/3	かわらけ2点出土
27	略円形	33	33	37	1層・2層・3層10YR黒褐2/3	
28	(略円形)	43	42	32	1層2.5YR黒褐3/1・2層10YR黒褐3/2	
29	不整円形	19	16	13	1層7.5YR黒褐3/2・2層7.5YR黒褐3/1	
30	不整梢円形	75	43	7	1層暗褐3/4	
31	(不整梢円形)	21	—	10	1層2.5Y黒褐3/1・2層10YR黒褐3/2	
32	梢円形	45	40	10	1層7.5YR黒褐3/2	
33	不整梢円形	76	57	7	1層10YR黒褐3/2	
34	梢円形	26	23	11	1層10YR暗褐2/2	
35	略円形	21	21	23	1層10YR黒褐2/2	
36	略円形	27	27	20	1層2.5Y黒褐3/2・2層10YR暗褐3/3	
37	円形	13	12	6	1層2.5Y暗オリーブ褐3/3	
38	円形	18	18	13	1層10YR黒褐3/2・2層10YR暗褐3/3	
39	略円形	44	44	29	1層・2層・3層10YR黒褐3/2・4層10YR黒褐2/3	
40	梢円形	24	20	19	1層2.5Y黒褐3/2・2層2.5Y黒褐3/2	
41	不整円形	23	22	21	1層2.5Y黒褐3/2	
42	梢円形	23	18	18	1層2.5Y黒褐3/2・2層・3層2.5Y暗オリーブ褐	
43	梢円形	14	12	13	1層2.5Y暗オリーブ褐3/3・2層10YR黒褐2/2	
44	略円形	17	16	20	1層2.5Y暗オリーブ褐3/3	かわらけ2点出土
45	略円形	22	19	21	1層2.5Y暗オリーブ褐3/3	
46	不整梢円形	42	26	24	1層2.5Y黒褐3/2・2層10YR暗褐3/3	
47	梢円形	43	34	37	1層10YR黒褐3/2	かわらけ1点出土
48	梢円形	48	43	31	1層2.5Y暗オリーブ褐3/3・2層2.5Y黒褐3/2	
49	略円形	71	59	37	1層2.5Y黒褐3/2・2層2.5Y黒褐3/2	
50	円形	27	26	31	1層2.5YR黒褐3/1	かわらけ1点出土
51	不整円形	15	14	26	1層10YR暗褐3/3・2層2.5YR黒褐3/2	
52	不整円形	28	26	25	1層2.5Y黒褐3/2	
53	略円形	32	31	27	1層2.5YR黒褐3/1・2層2.5YR黒褐3/1	ピット54と重複
54	(略円形)	26	—	19	1層10YR黒2/1	ピット54と重複
55	梢円形	41	32	22	1層10YR暗褐3/3・2層10YR暗褐3/4	
56	略円形	23	21	9	1層5Y暗オリーブ4/2	
57	略円形	29	27	8	1層2.5Y黒褐3/2	
58	(円形)	19	—	17	1層10YR黒2/1	
59	梢円形	34	26	7	1層10YR黒褐2/2	
60	梢円形	28	24	35	1層2.5Y黒褐3/2	
61	略円形	17	15	17	1層2.5Y黒褐3/2	かわらけ2点・擂鉢1点 灰釉皿1点
62	梢円形	38	34	22	1層2.5Y黒褐3/1	瓦質土器3点 かわらけ1点
1号土坑	隅丸方形	97	93	21	1層2.5Y暗オリーブ褐3/3・2・3層2.5Y黒褐3/2・4層10YR暗褐3/3	

4 出土遺物

中曲輪からは多数の遺物が出土しているが、多くは調査区掘削中ないしは造構確認作業中に出土したものが多数を占め、造構に伴うものは少量に留まっている。内訳はこれまでの調査同様かわらけが最も多く、次いで陶磁器、在地土製品などの順で出土している。近世の肥前碗、瀬戸の陶磁器碗皿・近代銅版転写の碗皿、徳利なども出土しているが、造構に伴わないものは本報告では図化していない。カウントした遺物点数は破片点数である。

(1) かわらけ

出土遺物全体の9割近くを占めるのがかわらけである。かわらけは大小の2規格に大別され、武田氏館跡で出土するのは褐色系の底部に回転糸切り痕の残るロクロ成形かわらけである。本調査区で出土したかわらけは、以下のように分類される。分類に際しては特徴が明確な大形のかわらけを基準としている。

- A I 類 器壁は厚く、1段の稜線を形成しつつ口縁部にかけて直線的に立ち上がる。胎土は比較的細かい。
- A II 類 器壁は厚く、口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。内底面中央は凹む。胎土は比較的細かい。
- A III 類 器壁はやや薄く、口縁部まで弱く内湾しながら立ち上がる。口縁端部はやや尖る。胎土は粗く、石英などの鉱物粒子が多量に混入する。
- A IV 類 A III 類に類似するが、内底面が凹み、直線的に立ち上がる。口縁端部はやや尖り、外反気味に開く。
- A V 類 A IV 類に類似するが、器高はやや低く、器壁もやや厚い。
- B I 類 手づくね成形によるかわらけであり、口縁部付近を横撫する。口縁部内面は弱く折れが生じる。胎土は精緻である。
- B II 類 B I 類に成形技法は類似するが、胎土はやや粗い。
- C 類 器壁は薄く、弱く外反し立ち上がる。底部から口縁部へかけて笠状工具で削り整形を施し、口唇部を横撫する。胎土は精緻で色調は白い。
- D 類 ロクロ成形によるものと考えられるが、胎土は精緻で焼成が不十分なためか摩滅が激しく、器形の特徴は不明である。色調は灰褐色系である。

以上のように成形技法や形態、胎土、色調などから大きく4種類に分類した。本調査においてはA III 類～A V 類が最も多く、破片点数にして約2750点出土している。27・33・46はA III 類、19・22・26・34・35・38・45・62・70・81がA IV 類、36・37・71がA V 類である。次いでA I 類、A II 類が約740点ほど出土しており、A I 類が4・13・15・61、A II 類が3・7である。C 類は74の他48点、D 類21点、B 類は79・80の2点のみという結果となっている。10・12はピット61から出土した一括資料であるが、口縁部は強い横撫でにより明瞭な稜線が形成される。口唇部のみ外に開くように整形されているため、上から見ると手づくねの形態に類似している。他にも分類していない特殊なものとして、耳皿や小型椀なども少量出土している。

(2) その他土器製品

内耳鍋4点、擂鉢・鉢16点、火鉢26点、香炉1点、不明品45点などがあり、中には瓦質製品も出土している。火鉢などは87のように口縁部付近に文様を押印するものが多い。擂鉢は擂目が不明瞭なものや、91のような小形の捏鉢も見られる。

瓦質土器製品は4号溝跡から57の擂鉢が出土している。74は1号土坑から出土しているものの、器種は不明である。瓦質土器は出土数は57・74も含め擂鉢2点、不明品3点と少

なく、質も悪いため、在地で製作された製品と考えられる。

(3) 国産陶器

瀬戸美濃（灰釉皿 6 点、小皿 1 点、鉄釉皿 6 点、天目 10 点、小碗 1 点、擂鉢 4 点、壺 1 点）

瀬戸美濃製品は全体として 28 点出土している。碗皿類は比較的少なく、18・96 は灰釉の端反皿で大窯 1 段階のものである。99 は口縁部のみで大窯 2 段階の丸碗と考えられる。鉄釉製品である 95 の天目茶碗は大窯 1 段階である。97 が大窯 2 段階の皿で、101 の小碗は大窯 3 段階である。他に 109 などは大窯段階の茶壺であり、4・5 のような擂鉢なども出土しているが、細片である。中でもピット 61 から出土した 17 は口縁部のみであるが、審窯期段階の擂鉢で後 IV 期新段階のものである。

志戸呂（擂鉢 1 点、碗 1 点）

擂鉢 104 は大窯 4 段階前半の遺物であり、擂目は 1 単位で 21 本程度施されている。これまで武田氏館跡内においては出土例がなく、武田氏滅亡後に搬入された遺物と考えられる。今後資料の増加に期待したい。94 は产地不明の碗で様相としては志戸呂に近いようであるが、器内外面で釉薬が異なり、内面は鉄釉で外面はやや濁った灰釉である。

常滑（甕 7 点）

常滑製品の出土量はきわめて少なく、107 は甕の肩部付近と見られる。他にも図化されていないものの、甕の一部と見られる破片が出土しているに留まっている。

(4) 輸入陶磁器

青 磁（碗 3 点、盤 4 点、壺 2 点、皿 2 点、菊皿 2 点、輪花皿 2 点、不明 1 点）

今回出土している青磁は比較的良品であり、線描の蓮弁文碗などは 1 点もなく、碗皿類も骨付以外は全面に釉薬が施されたものばかりである。23 は錦蓮弁文折縁皿底部で、98 は無文折腰碗底部、112 は大盤底部、113 は菊皿口縁部、114 は大盤口縁部である。他にも小破片のため図化には及んでいないが、輪花皿や壺など多種多様な器が出土している。年代的には 13 世紀～14 世紀代の骨董的な製品を主体とする。

白 磁（端反皿 5 点、菊皿 3 点、輪花皿 1 点、口禿皿 4 点、不明 1 点）

主に 102 のような端反皿を主体とする。中には 14 世紀～15 世紀代の口禿皿も 4 点ほど出土している。そのうち 1 個体は披歎した痕跡が見られる。他にも 106 のような大きな稜を描く菊皿や輪花皿、小壺など小型の碗皿類を中心に出土している。49 は 1 号堀跡出土の碗口縁部であり、口唇部は釉薬の溜りにより弱い玉縁状となるが、時期などは不明である。

青 花（碗 10 点、皿 11 点、大皿 3 点、小壺 2 点、壺 1 点、盤 1 点、不明 6 点）

出土した遺物の中で青花が最も多い割合を占めるが、小破片のため図化可能であったものは少量であった。図化不可能であったものを含めた陶磁器の構成は、小野氏分類（小野氏 1982）の皿 B 1 群を主体とする 16 世紀前～中葉に位置づけられる一群はきわめて少ない。皿 B 2 群、皿 E 群など 16 世紀後半代の遺物は定量あるが、16 世紀後半の碗 E 群はほとんど見当らない。数的に最も多いのは 16 世紀末段階の精製・粗製の一組であり、25・48・93・105・117 が該当する。48 は 1 号堀跡から出土している端反皿で、内面見込みに魚文と海草のような文様を描く。高台疊付は面取り気味に削り、底部内面は露胎で、橙色系の発色が認められる。粗製皿であれば森氏分類（森氏 1995）の粗製皿 J 1 類に相当し、48 は精製品に近い胎上である。25・105 は陶胎の碗皿底部で、ぼやけた絵付けが施されている。117 は景德鎮碗 C 群のコピーとみられる粗製品で、高台疊付は釉を削り取っているものの、底部外側は全面的に施釉されている。いずれも中国福建省漳州窯系の一群と考えられる。皿 F 群も数は少ないものの出土が確認されている。

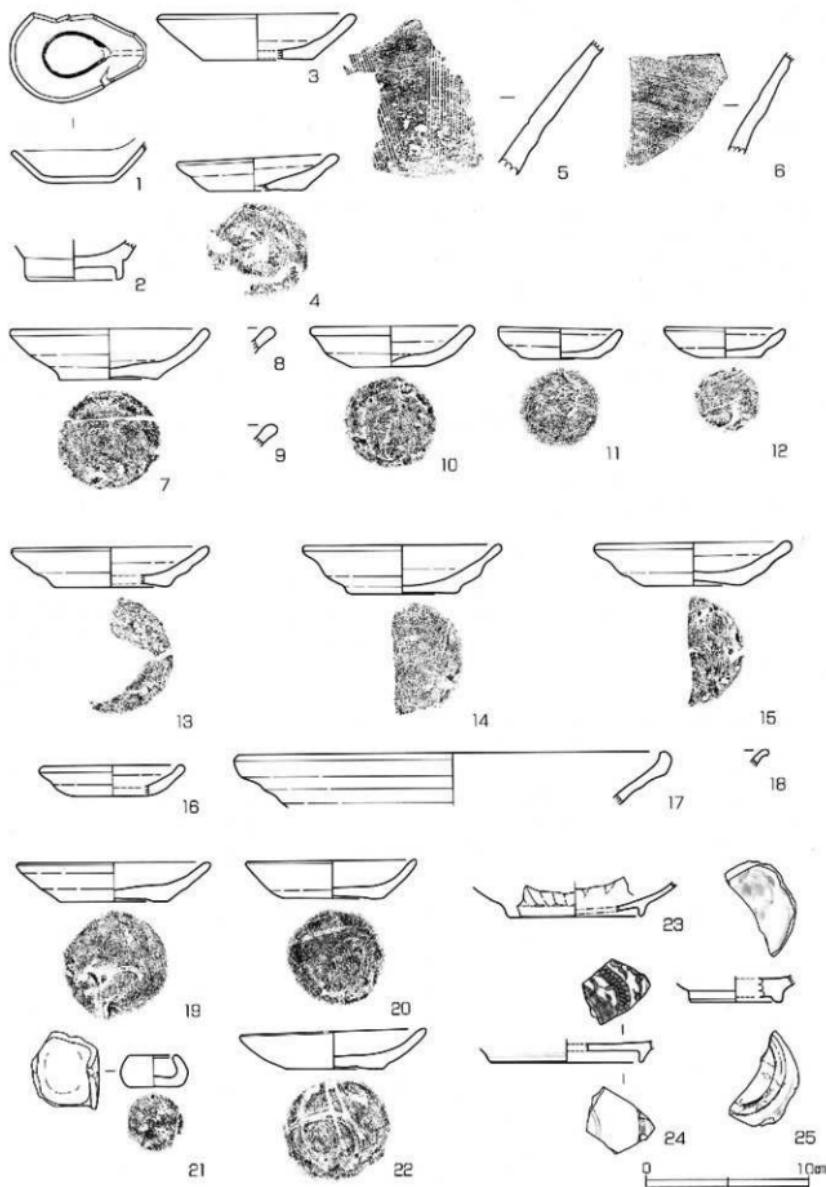


図12 出土遺物 (1)

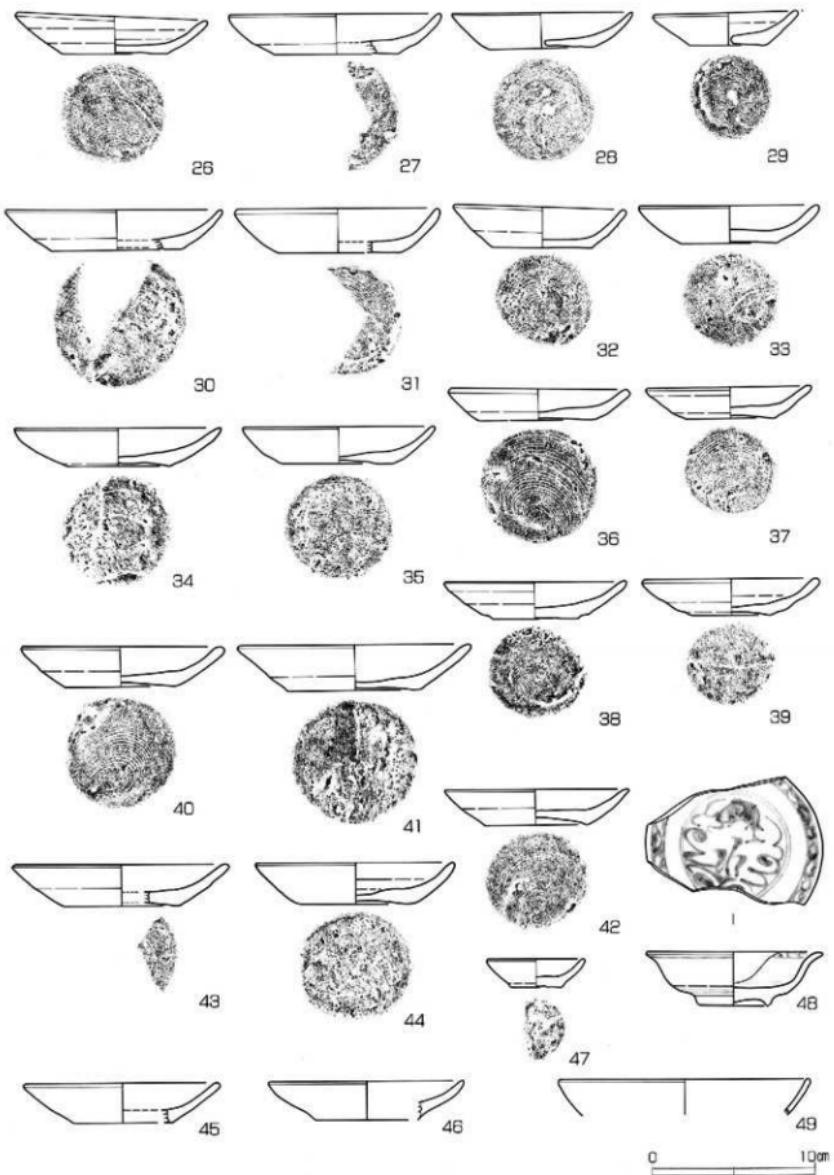


図13 出土遺物 (2)

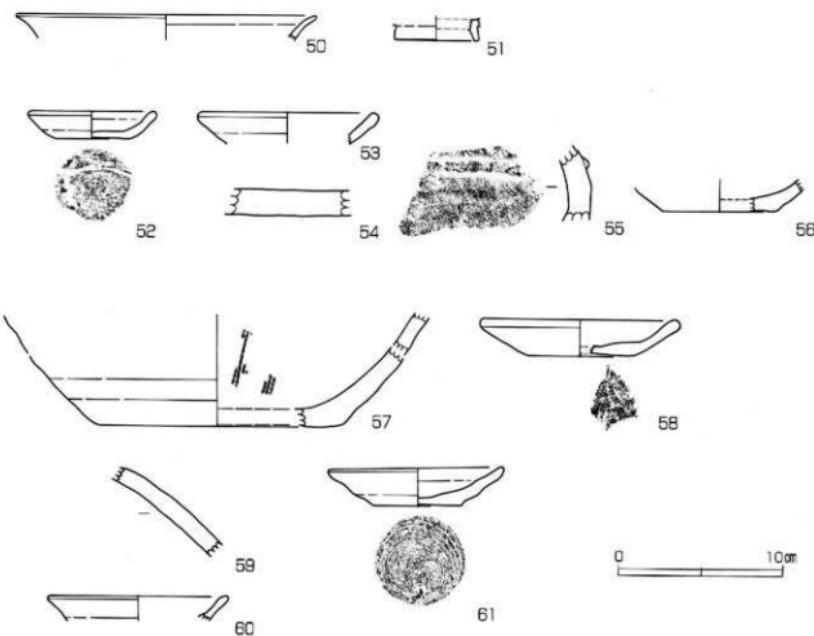


図14 出土遺物(3)

その他陶磁器

50は鉛釉陶器皿で15世紀代のものと考えられる。破片は二次的に被熱している。また、108は黒褐色系の胎土であり、タイなど東南アジア系の茶壺の破片の可能性がある。天日茶碗も中国から輸入されたものが小破片ながら出土していることからも、他の戦国大名同様、様々な地域の製品がもたらされている。

(5) 石製品

118は四角形の脚付き石製品で、外面には段差が設けられる。縁を残して彫り進め、中心を彫り抜いているため、手水鉢のようなものであろうか。他にも性格は不明であるが、四角形を呈した五輪塔地輪の部材のようなものが、3点ほど出土している。

(6) 金属製品

119は銚前であり、121は祥符通寶、122は古寛永通寶、123は寛永通寶である。他にも釘や槍先、径1.1~1.2cmの鉄砲玉も2点出土している。

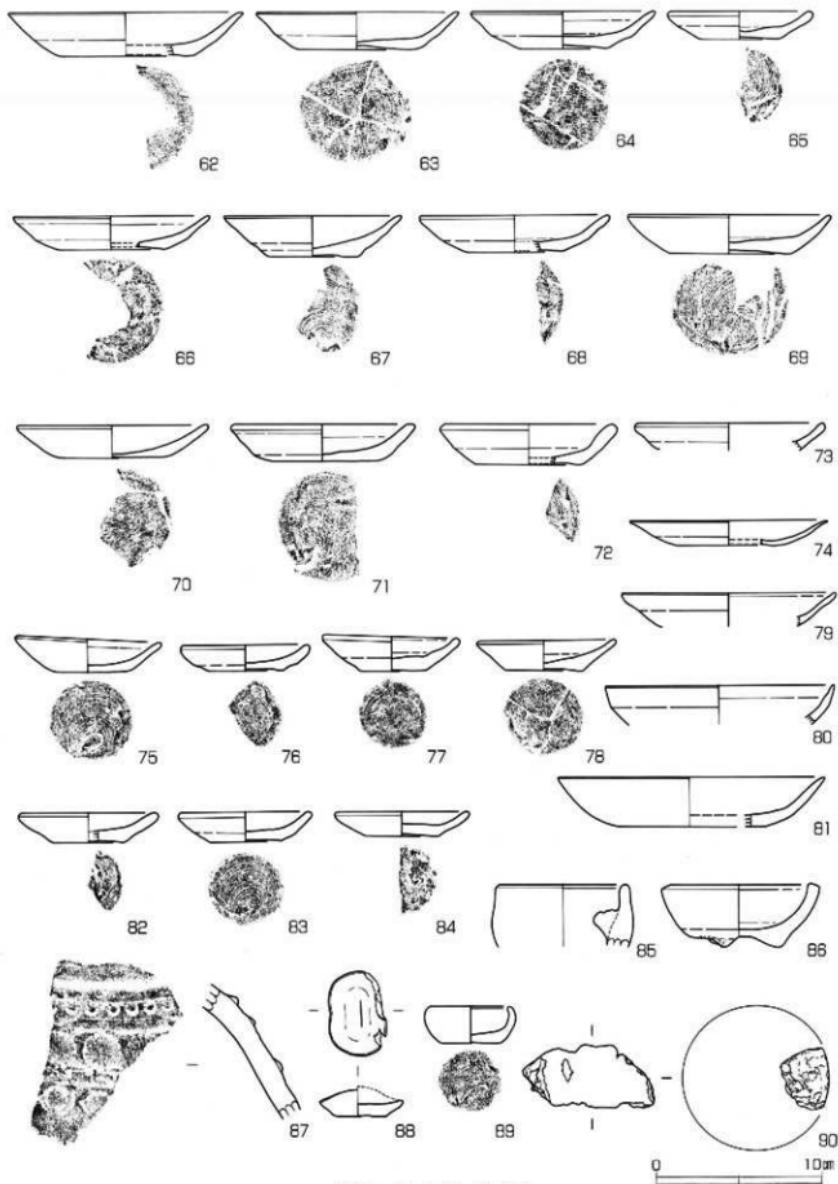


図15 出土遺物(4)

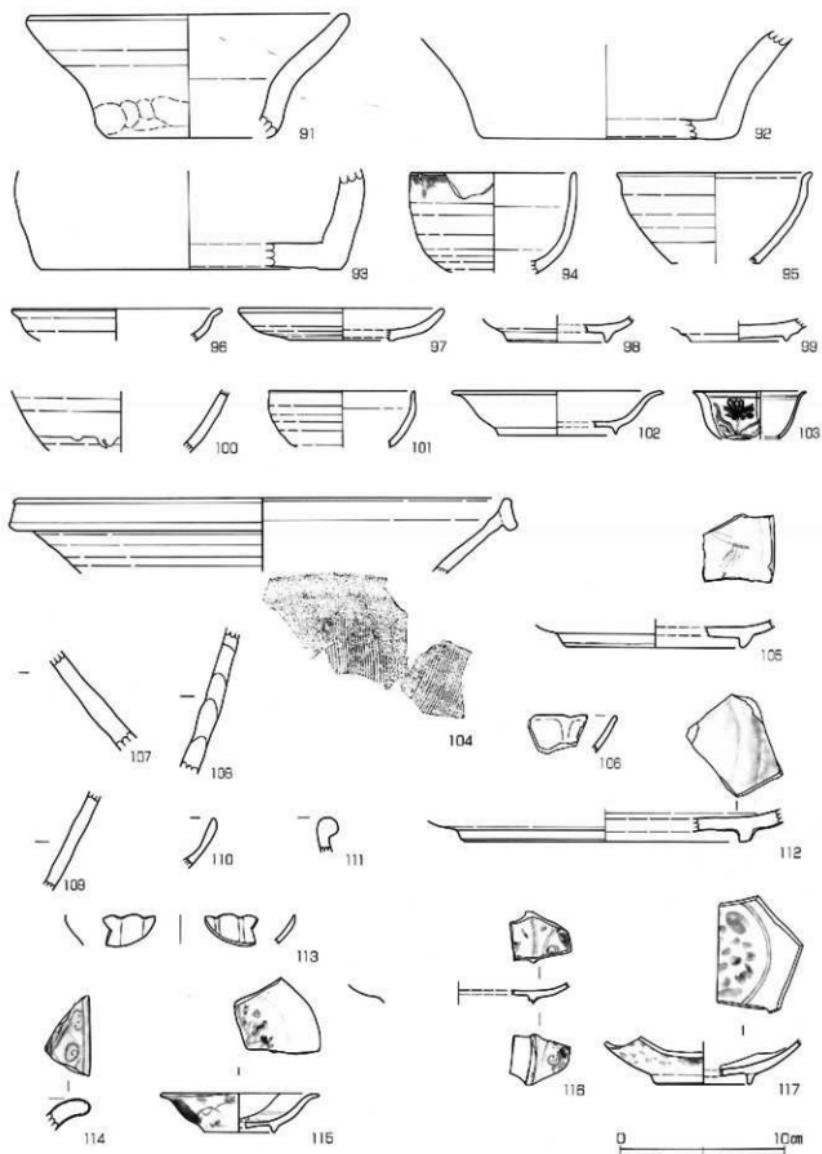


图16 出土遗物(5)

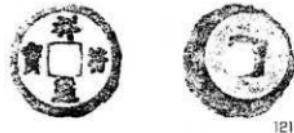
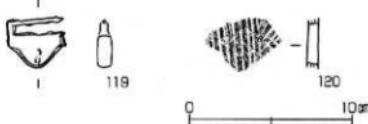
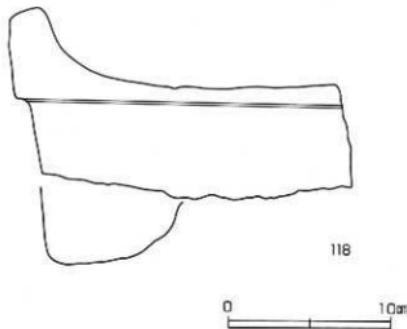
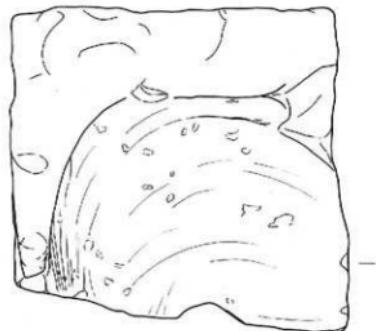


図17 出土遺物 (6)

表2 出土遺物観察表

(単位はセンチメートル。()は推定値)

番号	出土位置・遺構	器種	法 (口径・底径・高さ)	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	D-1・2	灰平焼 遷華	—	胎土/灰白 2.5YR 8/1	良	1号石列南	
2	1号石列(築削)	瀬戸 小甕	— • 5.2 • —	石英		良	
3	D-1・2	かわらけ	(11.8) • (6.8) • (2.8)	金雲母・石英 赤色スコリア	明赤褐色 SYR 5/6	良	
4	1号石列(築削)	かわらけ	9.6 • 5.8 • 2.0	長石	鈍い赤褐色 SYR 5/4	良	
5	1号石列(築削)	瀬戸・美濃 棚鉢	—	長石・赤色スコリア	胎土/浅黄褐色 10YR 7/3	良	大窓2 or 3
6	1号石列(築削)	瀬戸・美濃 棚鉢	—	長石・石英	胎土/浅い黄褐色 10YR 7/4	良	大窓1 or 2
7	Pit-6	かわらけ	11.8 • 5.9 • 3.05	金雲母・赤色スコリア	鈍い橙 7.5YR 6/4	良	
8	Pit-26	かわらけ	—	金雲母・赤色スコリア	橙 7.5YR 6/6	良	
9	Pit-26	かわらけ	—	金雲母・赤色スコリア	橙 7.5YR 6/6	良	
10	Pit-25	かわらけ	9.35 • 4.4 • 2.45	金雲母・長石・石英 赤色スコリア	鈍い橙 7.5YR 7/4	良	
11	Pit-25	かわらけ	7.25 • 3.3 • 1.8	金雲母・長石・石英 赤色スコリア	鈍い橙 7.5YR 7/4	良	
12	Pit-25	かわらけ	7.3 • 3.7 • 1.9	金雲母・長石・石英 赤色スコリア	鈍い橙 7.5YR 6/6	良	
13	Pit-44	かわらけ	11.65 • 6.6 • 2.4	金雲母・赤色スコリア	鈍い橙 7.5YR 7/4	良	
14	Pit-44	かわらけ	11.8 • 6.35 • 3.0	金雲母・長石・石英 赤色スコリア	鈍い橙 7.5YR 6/4	良	
15	Pit-61	かわらけ	11.55 • 5.8 • 2.6	金雲母・長石 赤色スコリア	橙 2.5YR 6/6	良	

出土遺物観察表

(単位はセンチメートル・()は推定値)

番号	出土位置・遺構	器種	法 (口径・底径・高さ)	形	七	色調	焼成	備考
16	Pit-61	かわらけ	8.4 · 4.0 · 1.9	金雲母・赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	
17	Pit-61	古瀬戸 振鉢	(26.2) · — · —		胎土/浅黄	10YR 8/3	良	後IV期新
18	Pit-61	潮戸・美濃灰釉壺反面			胎土/鈍・黄粉	10YR 7/3	良	大窓1
19	1号石壠跡	かわらけ	(11.6) · (6.4) · (2.4)	金雲母・長石・ 赤色スコリア	橙	2.5YR 6/6	良	
20	2号石列	かわらけ	10.5 · 6.1 · 2.3	金雲母・長石・ 赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 5/4	良	口縁部タール付着
21	1号石壠跡	特殊かわらけ		金雲母・長石・石英	明赤褐	5YR 5/6	良	
22	2号石列	かわらけ	11.3 · 6.0 · 2.3	金雲母・長石	灰白	7.5YR 8/1	良	
23	1号石壠跡	青花 盆	— · 9.2 · —		胎土/灰白	5YR 8/1	良	
24	1号石壠跡	青花 盆	11.0 · 4.1 · 3.3		胎土/灰白	2.5YR 8/1	良	
25	1号石壠跡	青花 碗	— · 5.35 · —		陶胎	胎土/鈍・黄橙	10YR 7/3	不良 粗製
26	1号壠跡	かわらけ	11.5 · 6.4 · 2.3	金雲母・長石	鈍い黄橙	10YR 7/3	良	
27	1号壠跡	かわらけ	(12.8) · (7.6) · 2.4	金雲母・長石	鈍い褐	7.5YR 5/4	良	
28	1号壠跡	かわらけ	10.9 · 6.5 · 2.2	金雲母・長石	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	中心部に穿孔
29	1号壠跡	かわらけ	8.7 · 4.7 · 2.2	金雲母・長石	鈍い褐	7.5YR 5/4	良	中心部に穿孔
30	1号壠跡	かわらけ	13.1 · 8.0 · 2.5	金雲母	鈍い黄橙	10YR 7/3	良	
31	1号壠跡	かわらけ	(12.2) · (7.4) · 2.7	赤色スコリア・長石	浅黄橙	7.5YR 8/3	良	
32	1号壠跡	かわらけ	10.3 · 5.8 · 2.5	金雲母・長石	鈍い橙	7.5YR 7/3	良	
33	1号壠跡	かわらけ	11.0 · 6.0 · 2.0	金雲母・長石・ 赤色スコリア	鈍い黄橙	10YR 7/2	良	
34	1号壠跡	かわらけ	12.4 · 6.15 · 2.3	金雲母・長石・ 赤色スコリア	橙	2.5YR 6/6	良	
35	1号壠跡	かわらけ	11.4 · 6.7 · 2.2	金雲母・長石・ 赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 7/4	良	
36	1号壠跡	かわらけ	10.7 · 7.0 · 1.9	金雲母・ 赤色スコリア	鈍い黄橙	10YR 7/3	良	
37	1号壠跡	かわらけ	10.0 · 5.6 · 1.9	金雲母・長石・ 赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	
38	1号壠跡	かわらけ	(11.0) · (5.3) · (2.3)	金雲母・長石	明赤褐	2.5YR 5/6	良	
39	1号壠跡	かわらけ	(10.6) · (4.8) · (2.2)	金雲母・長石	鈍い橙	7.5YR 7/4	良	
40	1号壠跡	かわらけ	12.2 · 6.8 · 2.4	金雲母・ 赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	口縁部タール付着
41	1号壠跡	かわらけ	14.0 · 8.2 · 2.8	金雲母・長石	鈍い黄橙	10YR 6/3	良	
42	1号壠跡	かわらけ	11.2 · 6.3 · 2.2	金雲母・ 赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 5/4	良	口縁部タール付着
43	1号壠跡	かわらけ	(13.0) · (7.2) · 2.5	金雲母・ 赤色スコリア	橙	5YR 7/6	良	
44	1号壠跡	かわらけ	11.9 · 6.5 · 2.5	金雲母・長石・石英	橙	5YR 6/6	良	
45	1号壠跡	かわらけ	(11.8) · (3.2) · 6.2	金雲母・赤色スコリア	鈍い褐	7.5YR 5/4	良	
46	1号壠跡	かわらけ	11.85 · 6.25 · 2.35	金雲母・長石・ 赤色・赤色又コリア	鈍い橙	7.5YR 7/4	良	
47	1号壠跡	かわらけ	(6.0) · (3.2) · (2.2)	金雲母・長石	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	
48	1号壠跡	青花 埴反皿	10.7 · 4.6 · 3.3		胎土/灰白	7.5YR 8/1	良	粗製
49	1号壠跡	白磁 瓶	(15.2) · — · —		胎土/灰白	5YR 8/1	良	
50	3号石列	船軸 盆	(18.4) · — · —		胎土/灰白	7.5YR 8/1	良	二次被熱
51	3号石列	青磁 瓶	— · (5.0) · —		胎土/灰白	5YR 8/1	良	二次被熱
52	1号溝跡	かわらけ	7.4 · 4.0 · 1.65	金雲母・赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 7/4	良	
53	1号溝跡	かわらけ	10.3 · — · —	金雲母・長石	鈍い橙	7.5YR 7/4	良	
54	1号溝跡	土器 振鉢		金雲母・ 赤色スコリア	鈍い黒	2.5YR 6/4	良	
55	1号溝跡	土器 火鉢		石英・赤色スコリア	橙	2.5YR 7/6	良	
56	2号溝跡	かわらけ	— · 6.6 · —	金雲母・ 赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	
57	4号溝跡	瓦質上器 振鉢	— · 14.4 · —	金雲母・ 赤色・赤色スコリア	鈍い黄橙	10YR 7/4	良	
58	4号溝跡	かわらけ	11.6 · 6.25 · 2.2	金雲母・ 赤色・赤色スコリア	橙	5YR 6/6	良	
59	1号土坑	瓦質土器 不明		金雲母・ 赤色・赤色スコリア	灰	N 5/	良	
60	1号土坑	かわらけ	10.2 · — · —	赤白・白黒・ 赤色・赤色スコリア	鈍い橙	5YR 7/4	良	
61	Pit-22	かわらけ	10.35 · 5.2 · 2.3	赤白・白黒・ 赤色・赤色スコリア	黑	N 1.5/	良	
62	D-3	かわらけ	(10.3) · (8.0) · (2.7)	金雲母・ 赤色・赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 7/3	良	
63	E-4	かわらけ	12.05 · 6.6 · 2.25	金雲母・ 赤色・赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 7/4	良	
64	E-5	かわらけ	11.05 · 5.50 · 2.3	金雲母・ 赤色・赤色又コリア	鈍い褐	7.5YR 5/4	良	
65	調査区一括	かわらけ	8.15 · 4.55 · 1.65	金雲母・ 赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	
66	調査区一括	かわらけ	11.65 · 6.15 · 2.0	金雲母・ 赤色・赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 7/4	良	
67	E-F-4	かわらけ	10.8 · 5.4 · 2.5	金雲母・ 赤色・赤色スコリア	鈍い黄椎	10YR 6/4	良	
68	F-4	かわらけ	11.45 · 5.8 · 2.2	金雲母・ 赤色・赤色スコリア	鈍い橙	7.5YR 6/4	良	
69	D-8-9	かわらけ	12.2 · 7.35 · 2.4	金雲母・長石・石英	橙	2.5YR 7/8	良	

出土遺物観察表

(単位はセンチメートル・()は推定値)

番号	出土位置・述標	器種	法 量 (口径・底径・高さ)	胎 土	色 測	焼成	備考
70	E-4 F-3・4	かわらけ	11.3・6.0・1.95	金雲母・長石 赤色スコリア	純い橙 7.5YR 6/4	良	
71	E-7	かわらけ	10.55・6.2・2.25	金雲母・長石 赤色スコリア	橙 5YR 6/6	良	
72	B-1	かわらけ	(10.4)・(6.5)・2.5	金雲母・長石 赤色スコリア	橙 5YR 6/6	良	
73	F-3・4	かわらけ	11.0・—・—	長石	純い黄褐色 10YR 4/3	良	
74	E・F-4	かわらけ	11.9・6.2・1.5	灰白	2.5Y 8/1	良	白かわらけ
75	調査区一括	かわらけ	8.65・4.1・2.0	金雲母・長石 赤色スコリア	純い橙 7.5YR 6/4	良	
76	E-4	かわらけ	7.55・4.3・1.6	赤色スコリア	明赤褐色 5YR 5/6	良	
77	E・F-4	かわらけ	8.0・3.5・2.1	金雲母・雲母・長石 赤色スコリア	純い褐色 7.5YR 5/4	良	
78	C-4	かわらけ	8.3・4.7・1.8	赤色スコリア	純い黄褐色 10YR 7/4	良	
79	B-1	かわらけ	12.95・—・—	金雲母・雲母 赤色スコリア	純い橙 7.5YR 7/4	良	手づくね?
80	埋乱	かわらけ	—・(13.8)・—	赤色スコリア	浅黄褐色 10YR 8/4	良	手づくね
81	C-1	かわらけ	(16.2)・(8.6)・(3.1)	金雲母 赤色スコリア	純い橙 7.5YR 6/4	良	
82	D-3	かわらけ	(8.0)・(4.2)・(1.9)	金雲母・長石 赤色スコリア	橙 5YR 6/6	良	
83	E・F-3	かわらけ	7.8・4.4・1.8	金雲母 赤色スコリア	橙 7.5YR 6/6	良	
84	F-4	かわらけ	7.85・4.35・1.45	長石	灰黄褐色 10YR 4/2	良	
85	B-2	上器 不明	(7.8)・—・—	金雲母・長石 赤色スコリア	明赤褐色 5YR 5/6	良	
86	調査区一括	土器 烧け	8.40・5.80・3.9	金雲母・長石 赤色スコリア	赤褐色 5YR 4/6	良	
87	C-8	土器 火鉢	—・—・—	金雲母・長石 赤色スコリア	純い橙 5YR 6/4	良	
88	C-4	かわらけ	—・—・—	金雲母・長石 赤色スコリア	純い橙 7.5YR 6/4	良	耳皿
89	D-2	かわらけ	(4.8)・(3.6)・(2.2)	金雲母・長石 赤色スコリア	橙 7.5YR 7/6	良	
90	B・C-8	フリゴの羽口	外径 (9.0)	雲母・長石	橙 5YR 7/6	良	
91	B-2	土器 捏鉢	(19.2)・—・—	金雲母 赤色スコリア	橙 5YR 6/6	良	
92	F-4	土器 捏鉢	—・15.0・—	金雲母・赤色 赤褐色・赤色スコリア	粉 5YR 6/6	良	
93	B-2	土器 火鉢	—・(18.2)・—	金雲母・長石 赤色スコリア	橙 5YR 6/6	良	
94	C・D・E-8	不明 碗	9.85・—・—	—	灰白 10YR 7/1	良	内面鉄粒 外面灰粒
95	E-5	瀬戸 美濃 天目茶碗	(11.8)・—・—	—	胎土/浅黄褐色 10YR 8/3	良	大窓 1
96	調査区一括	瀬戸・美濃 沢軸頭	—	—	—	良	大窓 1
97	調査区一括	瀬戸・美濃 沢軸頭	(13.0)・—・—	—	胎土/純い裏板 10YR 7/3	良	大窓 2
98	調査区一括	吉磁 碗	—・6.0・—	—	胎土/灰白 2.5Y 8/1	良	
99	B-4	瀬戸・美濃 鉄軸皿	—・5.8・—	—	胎土/浅黄褐色 10YR 8/4	良	大窓 2 or 3
100	E-4	不明(中国か) 天目	—	—	胎土/純い裏板 10YR 7/2	良	
101	B-7	瀬戸・美濃 小碗	8.75・—・—	—	胎土/浅黄褐色 10YR 8/4	良	大窓 3
102	調査区一括	白磁 盆	12.5・7.2・2.7	—	胎土/灰白 10YR 8/1	良	
103	E・F-4	青花 小環	(7.0)・—・—	—	胎土/灰白 5Y 8/1	良	
104	B・C-8	志戸呂 捏鉢	30.0・—・—	—	胎土/灰 5Y 8/2	良	大窓 4
105	B-8	吉花 大皿	—・10.8・—	陶胎	胎土/灰白 10YR 8/2	不良	粗製
106	D-7・8	白磁 輪花皿	—	—	胎土/灰黄褐色 10YR 6/2	良	
107	E-4	常滑 豊	—	—	胎土/黑 N 21	良	
108	B-8	不明 壺	—	—	胎土/灰 7.5YR 2/1	良	タイ?
109	B-8	不明 壺	—	—	胎土/褐灰 10YR 5/1	良	
110	E-4	瀬戸・美濃 瓶	—	—	胎土/純い黄褐色 10YR 7/3	良	大窓 2
111	調査区一括	不明 壺	—	—	—	良	
112	調査区一括	青磁 大盤	—・(17.0)・—	—	胎土/灰白 5Y 8/1	良	
113	調査区一括	青磁 茶皿	(14.0)・—・—	—	—	良	
114	調査区一括	青磁 人盤	—	—	胎土/灰白 5Y 8/1	良	
115	C-4	青花 盤	(9.4)・(4.3)・2.4	—	胎土/灰白 5Y 8/1	不良	粗製
116	B-8	青花 盤	—	—	胎土/灰白 2.5Y 8/1	良	
117	E-5	青花 碗	—・5.6・—	—	胎土/灰白 7.5YR 8/2	不良	粗製
118	D-8	石臼	—	—	—	—	
119	C-5	金屬 錠前	—	—	—	—	
120	C-8	縄文土器	—	—	—	良	
121	調査区一括	古錢	径2.37 厚さ0.13 重さ1.9g	—	—	—	
122	調査区一括	古錢	径2.83 厚さ0.14 重さ5.0g	—	—	—	
123	F-3・4	古錢	径2.54 厚さ0.10 重さ3.3g	—	—	—	

第3節 小括

(1) 検出遺構

近世、近代に位置づけられる1号石列及び1号石積、1号敷石状遺構は、武田神社本殿基礎に削平されていることから神社創建以前の遺構であることは間違いない。武田氏館跡の機能停止後、大正8年の神社創建に至るまでこの場所に存在していた可能性があるのは、現在天守台上に祀られている石祠の法性宮である。武田氏館跡を描いた坂田季吉氏所蔵の「武田古城縄張之図」には法性宮の祠堂が描かれており、石祠には天明元年（1781）に古府中日影組の人々により祀られたことが刻まれている。裏込から出土した瀬戸小甕の年代ともほぼ一致することから、遺構は信玄を祀った法性宮の祠堂基礎の可能性が高い。

中世遺構については、検出された遺構の多くが地山を掘り込んだものを主体とし、その変遷については図18にまとめている。



図18 遺構変遷図

中曲輪Ⅰ期：遺構群の切り合いから1～4号溝跡が最も古期に位置づけられる。遺物はA I類と考えられるかわらけが出土しているものの、覆土上層の出土が多く直接的に遺構の年代を示すものではない。溝跡は降雨などによる一時的な流水時に機能していたものと考えられる。溝跡は概ね同一軸であり、1・4号溝跡と2・3号溝跡が規則的に近い様相である。1・4号溝跡、2・3号溝跡とも溝間は約6mであり、硬化面や砂利敷きを検出した訳ではないが、位置的に軸線の延長線上が武田の南北基幹街路延長線上に位置するため、検出状況や覆土の様相から館造成前後の道路側溝を可能性として提示しておく。

中曲輪Ⅱ期：溝跡の廃絶後は1号掘立柱建物跡が出現する。柱穴列は南側で狭い間尺になり、全体としてはやや歪むとともに奥行きも狭くなるため、構造や用途などは不明である。出土遺物から武田氏館初期段階の建物跡と考えられ、簡易な建物跡であることから、館の中心建物群を構成するような本格的な建物は確認することができなかった。

中曲輪Ⅲ期：柱穴列は3条検出されているものの、相互に切り合いではなく、時期を特定することは困難である。1号柱穴列は他の遺構群と大きく軸線を異にするため、単独で一時期存在すると考えられる。2・3号柱穴列はピットの規模は違うものの、位置、柱間ともほぼ一致していることから同時存在の可能性がある。かわらけの様相に若干の相違がみられたため単独遺構として柵列ないしは塀としたが、場合によっては建物の一部となることも想定される。帰属年代は明確ではないものの、遺物からみる限り16世紀中葉以降と考えられる。

中曲輪IV期：調査区における最終段階の遺構は、1号石壙跡及び2号石列、1号堀跡である。石壙跡は西側で堀が既に立ち上がるにも拘らず、調査区C7内まで石壙裏込が広がっていることから、石壙は未調査に終わったC8区内で南に延びている可能性が高く、未調査区内で全体が南に折れる構造であると考えられる。石壙跡は第44次調査でも検出されており（図19・20）、構造的には同じであるため本調査区検出の石壙跡に関しても、5～6段程度石が積まれていたと考えられる。

以上のような変遷過程を想定した。石壙跡基底部にあたる石の面に線刻が刻まれていたことも興味深い（図21・写真20）。拓本では明確に出なかった部分もあるが、多数の線が刻まれている。線刻が描かれている石が多数確認されている甲府城跡石垣でも見かけない線刻であり、宮里氏（宮里1999）の言うように呪術、魔除けとして刻まれたものである可能性はあるが、ただ1か所であるため性格や意味についての断定は困難である。

石壙跡の構築年代については、「山梨県史だより」第14号に紹介されている加藤光泰の事跡を記した「北藤録」に関連する記載がある。加藤光泰は豊臣秀吉の直臣で、天正19年（1591）から文禄2年（1593）まで甲斐に封じられている。「北藤録」では「古府中ノ城ハ武田ノ居館ニ修復ヲ加ヘ、南北ノ外曲輪井堀ヲホリ石垣ヲ築テ光泰居城トス」と、加藤氏が武田氏館内に石垣を築いたとしており、1号石壙跡及び1号堀跡から出土した陶磁器の年代観からも合致する。ただし、時期的に甲斐国は短期間で領主が入れ替わっているため、遺物の年代から断定することは困難であるが、石積の技術から前段階に甲斐を領有していた徳川氏によるものとは現時点の研究成果では考えられず、今後に課題を残した。

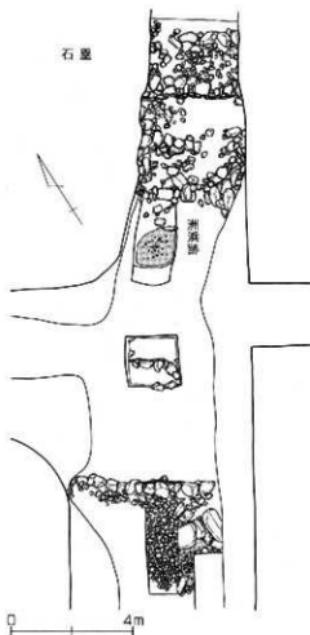


図19 第44次調査遺構平面図

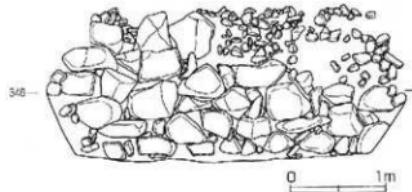


図20 第44次調査1号石壙

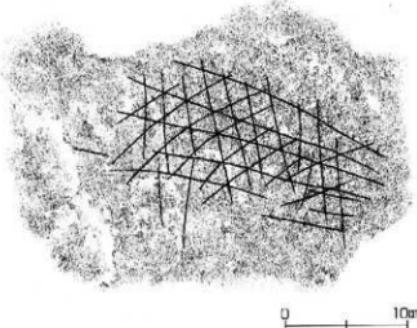


図21 第56次1号石壙跡線刻

(2) 出土遺物

武田氏館跡第44次調査同様、かわらけが圧倒的多数を占める。本調査区では包含層が削平されていることから、遺物の様相は遺構出土資料に求めざるを得ない状況である。特にかわらけの中でも主体を占めるロクロA類は厚手で口縁端部が丸いA I・II類と薄手で口縁端部が尖るA III類～A V類の大きく2つに大別される。前者はピットや溝跡などの遺構から出土し、石墨跡ではほとんど出土していない。後者は石墨跡周辺から出土し、ピットなどには1点も含まれない。西曲輪中段平場3号溝跡、味噌曲輪東西土塁一括資料は前者のみで後者は存在しない。したがって、現段階ではA I・II類は永正16年（1519）以降天正9年（1581）前後の武田氏段階に生産されていた一群と言える。

反対に本調査区でかわらけ全体の77%を占めているA III類～A V類は、共伴遺物が25・48の漳州窯系碗皿類であるため、時期的に16世紀後半以降の武田氏滅亡前後の1括資料と言える。同形態のかわらけは、勝沼氏館跡、新府城跡でも確認されている。勝沼氏館跡では16世紀末段階に位置づけられ、新府城跡は史料からすれば16世紀後半に武田氏最後の居城となり、その後、短期間ながら徳川家康が天正壬午の変に際して再入城、再整備している城である。新府城跡の出土例からみると、A III類～A V類のかわらけが主体を占める中で、A I・II類のような厚手の武田氏段階のかわらけも僅かながら確認されているため、かわらけが武田勝頼期まで存続している可能性が考えられる。逆に新府城跡の主体をなすかわらけは徳川期以降であることになり、年代的に天正10年（1582）以降となる。

両者には形態、胎土の質に違いがあり、天正10年前後でかわらけの作り手が替わったようにも見える。武田氏滅亡と本能寺の変から始まる天正壬午の動乱や領主交代によりかわらけの供給体制が再編成されたか、もしくは動乱の最中にかわらけ工人に何らかの異変が起こり、工人の交替が行われたかなど様々な要因が考えられる。

陶磁器に関しては、国産の瀬戸美濃に比べ、圧倒的に青花などを主体とする輸入陶磁器が多い。瀬戸美濃は天目茶碗が最も多く、周辺遺跡で高い比率を占める灰釉皿などは少数である。天目茶碗を除く国産碗皿類の出土率が低いという点では、第44次調査時と変化はないが、確実に104の志戸呂播鉢が確認されたことは成果であった。武田氏滅亡後に館は再利用されているだろうと考えられてきたものの、実際に大窯4段階に位置づけられる国産陶器はこれまで出土が確認されなかった。志戸呂も当館跡において出土例がなかったが、今後出土数も増加するものと思われる。

輸入陶磁器については、青磁などに権威財としての大型製品が見られるが、その多くは小型の碗皿類である。青磁では武田氏館主郭部の調査においては、これまで16世紀代に他の遺跡で見られる外側に櫛状工具で蓮弁を線刻する青磁碗などは1点も出土しておらず、出土する青磁碗の多くは13世紀後半から14世紀に位置づけられる。したがって武田氏における青磁の価値観は、骨董的な要素が強いものを好んで用いていたと考えられる。

全体で34点出土している青花は碗皿類を主体とし、精製品24点、粗製品10点を数える。數的に陶胎の碗皿を含む青花粗製品は、全体の3分の1を占めている。しかし、完全に陶胎になる粗製品は4点ほどであり、他は釉薬などからすれば粗製に含まれるもの、胎土は比較的精製に近いように見える。また、精製品の中でも万暦様式のものが多く見受けられ、出土した青花全体の年代でみれば、16世紀後半以降の青花群が最も主体を占めていることが明らかになった。また、これまで認識不足であったが、過去表面採集されているものも含め武田氏館跡主郭部では意外と16世紀後～末期の製品が高い割合を占めていることから、今後、共伴する土器・国産陶器などの組成とともに、武田氏段階及び滅亡後の改修の様相が遺構からも解明されることを期待したい。

第3章 武田氏館跡第59次調査(神社参道石垣解体工事に伴う主郭部南土壘の調査)

第1節 調査区の概要

1 調査に至る経緯

武田氏館大手口は東側であったが、神社創建時に神社正面である南からの参詣者往来を行うため、館を囲んでいた土壘を切り崩し、新たに神社参道が設けられた。分断された土壘の両側は、谷積みによる石垣で覆われ今日に至っている。

しかし、長い歳月とこの年の集中豪雨の影響などで石垣の一部が大きく脹らみ、崩落の危険性が高くなつた。武田神社からも神社参詣者の安全確保のためにも早急な対応が求められ、甲府市教育委員会では、文化庁、県教育委員会などと協議を重ねた。石垣構築時の造成状況は未知数であつても、裏側に残存土壘がある限り造構の保護を前提としなければならず、施工業者とも相談して史跡保護に最善を尽くしつつ解体を行うこととなつた。解体に際しては、土壘本体への掘削は行わず、あくまで石垣造成に関わる構築材を除去し、解体後甲府市教育委員会で土壘断面の状況確認と記録保存を行うこと、改修は現状景観を復旧することを申し合わせ、慎重に解体工事を進めた。

石垣の解体は、神社境内地側から重機により掘削を行い、石の落下と全体の崩落を防止するために石垣裏込の栗石から掘削して、一石ずつ内側に引き込みながら全体を下げた。通常であれば一度に解体、掘削するところを一段一段順序よく石を崩したため、解体にはかなりの時間を要した。解体した結果、石垣の根石は東西とも現地表よりも予想外に深く、土壘の傾斜を利用しつつ設置されていたが、石垣栗石の奥行きは狭い範囲に留まつてゐた。

2 調査の方法

神社参道石垣の解体及び調査に関しては、史跡武田氏館跡調査團の指導を受けている。基本的に学術調査による大規模な掘削ではないため、石垣及び裏込栗石、盛土の除去による土壘残存状況の把握と、土壘断面や掘削面の精査による土壘構造の観察を主たる目的とした。

全面解体前には、東西に分断されている土壘の両側で、土壘基部と頂部にそれぞれ2か所の試掘トレーニングを入れ、石垣裏側の状況と土壘の残存状況を把握し、解体のための情報収集に努めた。予想外に残存状況が良好であることが判明したため、調査は石垣造成時の掘削面をそのまま残す形で行った。石垣解体時の形に合わせて調査したため、土壘断面の傾斜や段切りが生じ、断面を齊一的に調査することは困難であった。そのため、記録は個々の直線的に記録可能な面と面をつなぎ合わせることで、全体の土壘断面図とした。また西側の断面のように、土壘上部から基部までが、段差なく傾斜地のまま一面をなしていた個所については、光波測量により測量を行つてゐる。

また、石垣根石解体後の土壘基部の土層観察において、地山を掘り込んで土層の落ち込みが確認され、東側土壘基部にサブトレーニングを設けて、落ち込みの確認を行つてゐる。結果、堀跡と考えられる造構を確認したもの、面的に調査することは石垣の改修時に与える影響が大きいと判断し、最低限度の確認に留めた。調査終了時には掘削した個所に関しては、砂を充填して造構を保護した。

3 調査の経過

10月 5日	土壘上の樹木等の伐採。	12月 24日	有限会社東雲測量の御協力により、パソコンを使用した光波測量を斜面部分の記録に導入。
10月 12日	石垣解体開始。	12月 25日	東側土壘基底部に堀跡と思われる落ち込みを確認。本日で年内の調査日程終了。
11月 30日	調査機材の搬入、足場設定と東側セクション作図用割り付け開始。	1月 6日	作業再開。堀跡の掘削開始し、約7mの堀跡の立ち上がりを検出。
12月 1日	南土壘東側壁面の精査及び石垣解体時の残土掘削。	1月 8日	西側下層に版築状の十層堆積を確認。東と同じく堀跡の埋め戻し土である可能性を認識。
12月 3日	東側壁面精査及び西側土壘上部の壁面精査。	1月 14日	西側全体写真撮影。
12月 4日	東側下段壁面精査西側中段及び下段壁面精査及び石垣解体時の残土掘削。	1月 16日	群馬県埋蔵文化財センター原眞氏来訪。
12月 8日	西側中段部分で、古い土壘面を確認。文化庁坂井秀弥氏来訪。	1月 17日	武田氏館跡調査団榎本正治氏来訪。
12月 9日	東側西斜面壁面精査。	1月 19日	東側全体写真撮影。
12月 10日	西側南斜面精査。	1月 20日	機材などを撤収する。調査を終了し、石垣改修工事着手される。
12月 14日	西側セクション作図用の割り付けを開始。		
12月 18日	北垣聰一郎氏来訪。東側下段において火災層を確認。		

第2節 調査の成果

本調査地区は、武田氏館跡主郭部南土壘の中央付近に位置し、現在は神社参道の石段と石垣が設置されている。大正8年に土壘は東西に分断され、断面は玉石谷積みの石垣で覆われた。大正期の石垣工事により土壘本体がどの程度まで破壊されたかまったく推定不可能であったため、本調査は、石垣解体後の土壘残存状況の把握及び土壘変遷過程の解明、構築技術の確認を主たる目的とした。結果として石垣裏側の遺構遺存状況は予想以上に良好であったため、大正期の石垣設置の際の掘削面に合わせて調査を実施した。セクションは全体を一つの面として通して実測することができなかつたため、全体図においては個々の面を接合したものを添付している。そのため、場所によっては不整合な部分、歪みの生じている部分もあるが、その点は御容赦願いたい。

1 遺構の概要

現状で土壘規模は、堀際から高さ約9m、幅約20mを測り、土壘南側には幅16mの水堀が戦国期から機能し続けている。土壘南斜面には何か所か土留めの石積が露出しており、平成8年度に実施された第48次調査においては、土壘基底部から堀底にかけて積まれた石積が検出されている（甲府市教育委員会1999）。

南土壘は大正8年の神社参道の開設により左右に分断されており、本文中では便宜的に土壘東・土壘西と分けて記載する。本調査区西側から10m延長上には、第44次調査地点が存在し、すでに南土壘の一部の断ち割り調査を実施している。調査段階で土壘は3時期の変遷を経て現在の形状に至っていること、最終期内側に3段の石垣を積み、全体的に改修工事が施されたことなどが判明している。また、西土壘の調査では土壘構築過程において積まれた土壘内石積を検出している。

2 南土壘東側（写真34～38）

土壘東の調査面は、館内部側から堀にかけて大きく3段の造成を受けており、館内部側は上段面、中段面（小規模な段差を含む）、下段面に分けられ、堀側は土壘天端から基底部にかけて一面の傾斜となっている。したがって、本文を進める上で便宜的に上段をA区、中段から下段をB区、南斜面をC区、堀際東壁面をD区とする（図22）。

まず、土壘最下位面B・C区の状況からみると、黄褐色の地山面は水平に整形されているため、意図的に平坦面を作り出しているように見える。おそらく館の造成に際して面を描えたものであると考えられる。この段階をⅠ期とする。（以下では土壘の存在の有無に係らず造成過程を便宜的に設定する。）

B区下位では地山面を約40cm程度盛土する形で一面平坦面が造成される。旧表土と考えられる厚さ10cm前後の暗灰黄色土層の堆積が認められ、この層は南へ傾斜しつつB区からC区まで続き、D区で土壘底面内に落ち込んでいた。そのため、落ち込みを追いかけD区壁際に幅50cmのサブトレンチを設定し掘削したところ、幅約7mの堀跡が確認された。堀跡南端は現堀跡に切られているが、元々堀幅は約8mほどあったと想定されるため、規模は現堀のちょうど2分の1となる。堀跡の検出された造成面は石垣基礎が設置されるため、トレント幅以上の掘削は避け、立ち上がりのみ確認し、約1mほどで掘削したところで終了している。したがって、堀底は確認しておらず、堀の深さなどは不明である。この旧堀跡を伴う生活面は堀際のみの確認であったため、土壘の存在は確認に至っていない。ここでは土壘がなく堀のみで区画したものと想定し、この段階をⅡ期とする。

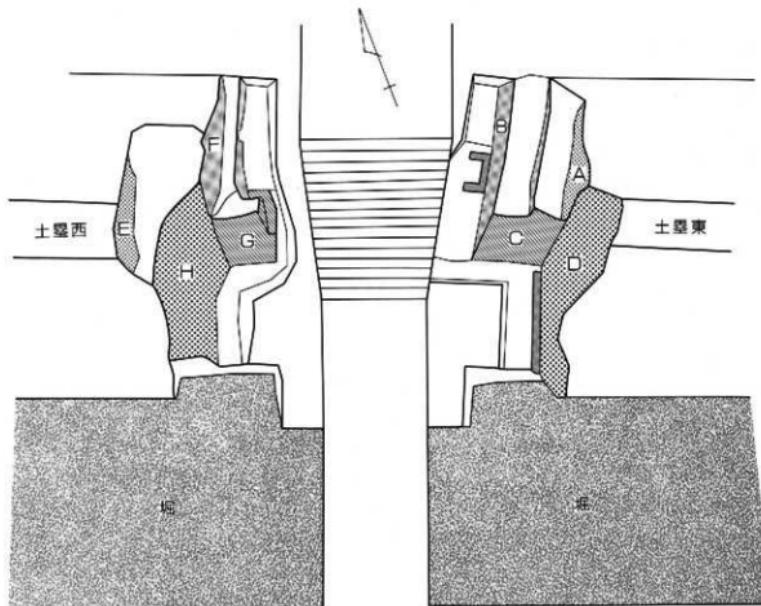


図22 南土壘調査区位置図

B区下位では、暗灰黄色土層の40cm上層で砂層で覆われた硬化面が検出された。堀際から3m北側で土壘と考えられる推定幅7m、基部からの高さ約2m程度の小規模な高まりを確認している。小規模土壘の表面は硬化しており、そのまま砂層を伴う硬化面に直結する。砂層直上には焼土と炭化物層が検出され、砂層も部分的に被熱していた。硬化面と砂層を覆う焼土層は火災によるものである可能性が高い。土壘と考えられる盛土から堀際にかけて形成されている硬化面は犬走り状の遺構になろうか。土壘が形成される段階をIII期とする。

その上層からは火災層と小規模土壘を埋め立て、変わって一回り大きな土壘が造成される。土壘は基底部から推定幅約10m、高さ約4.5mで土壘II期同様、旧表土と考えられる厚さ10cm前後の暗灰黄色土層を確認している。基本的に比較的粒子の細かな黒褐色土を使用して搔き上げているが、部分的に礫のみを大量に投げ込んで造成した個所が見られる。南側へ落ち込む表土層は、B区下位で次の土壘造成時に削平を受けているため、最終的にどのような形で堀に接続していたか不明であるが、ここまでは土壘II期で検出された堀をそのまま利用していたと考えられる。この段階をIV期とする。

続くV期は様相が一変し、今日の武田氏館跡の基礎となる大規模造成が行われた。V期では前段階のIV期に倍する規模まで一度に拡張されている。A区上層からD区にかけて地山上と考えられる礫混じりの鈍い黄褐色土を幾重にも搔き上げ、D区で検出された堀及びIV期の土壘全体を覆っている。土壘面には部分的に褐色の粘土層が土壘表面を被覆している。西曲輪などでも同様の粘土で、ある時期の土壘表面を覆う手法が用いられていることから同時性も考えられる。

D区においては斜面中位で土壘軸に対して直交する形で西側に面を持つ石積が検出されている。石積の面が西であることから大規模な土壘造成は大手のある東側から造成を行っていることが判明した。ただし、西土壘内で検出されている土壘内石積とは異なり、石積は全面的に築かず、部分的に積んでいることから、盛土造成段階において土の崩落防止と一時的な敲き締め効果を意図したものと考えられる。

3 南土壘西側（写真39~44）

土壘西は館内部側から上段面、中段面、下段面の大きく3段に分けて掘削され、堀側は上段から基底部まで段差なく一面に傾斜している。全体を便宜的に4分割し、上段をE区、中段をF区、下段及び南斜面をG区、堀際西壁をH区として報告を進めることとする（図22）。

土壘西の構造と変遷は基本的に土壘東に準じるもの、掘削範囲の違いから土壘西に関しては、G区を中心とする土壘基底部崩辺の土層観察が面として確保できなかったため、土壘III期の様相はほとんど確認できなかった。土壘西は東に比べ全体的に礫混じりの粗い土を搔き上げたものを積み重ねている。

最下層からみて行くと、I期は地山面で土壘II期になると東側と同様旧表土と考えられる暗灰黄色土層が確認できる。土壘東ではこの段階に堀跡が伴うが、西においては、堀跡延長線上は黒褐色土と暗灰黄色がレンズ状に堆積し、かつ、H区下位壁面中央で上層が全体的に沈んでいることから、堀は確実に延びてきているものと推測される。レンズ状堆積はモック1杯分に相当するとみられ、V期段階の大規模造成に伴う堀の埋め立て土層と考えられる。

上土壘においてもII期の暗灰黄色土の帶を確認している。土壘東では検出された旧表土は確認面を通じて帶状に堀まで落ち込んでいたため、そのまま土壘の壁奥東へ延長することが判明していたが、土壘西では土壘東のようにH区まで連続せず、南斜面途中で落ち込みレンズ状堆積へと続く。このことから、G区南斜面で堀跡は北側へ折れる可能性があり、

G区からH区は堀の角であることも考えられる(図23)。その場合、館は現在の半分、一町規模の館の段階を想定せざるを得ないが、部分的かつ表面的な観察であるため、現段階で判断することは困難である。

G区上位及び南斜面においては、小礫を積んだ石積が2列検出されている(図24)。西土壙の調査でも同様の石積が検出されており、石積は西側に傾斜しているため、土壙は東から徐々に土を盛り構築されたと考えられる。時期的にはIV期に伴う石積と考えられ、F区において天端が明確に確認され、天端幅は約1m程度で粘土質の黒褐色土は硬化している。

V期には土壙東同様、一度に地山土とを考えられる礫混じりの鈍い黄褐色土を構築土としている。構築工法はすべて搔き上げによるもので、やはり土壙表面には褐色粘土層が伴う。また、H区中位では粗い積み方ではあるが、土壙軸と平行で南斜面に石積が設けられる。土壙法面を2~3段の段構造で土留めしているが、石の面が南であることや礫を詰め込んだような粗い積み方からみると、土壙東とはまったく異なるものと考えられる。

またF区下位北壁では部分的に礫層が確認されており、中から石臼1点が出土している。中曲輪南土壙基底部には最終期に石垣が築かれるため、その裏込めの可能性も考えられる。

4 出土遺物

遺物は土壙表面の観察と床面精査が主たる調査であったため、出土量は少ない。土壙東の多くは土壙III期直上を覆っていた火災層もしくはIV期火災処理層中から出土しているものである。土壙西からは土壙IV期の直上を覆っていた黒褐色層からの出土であり、その内図化した1・2はほぼ完形のかわらけである。3は土壙東火災層出土、4は堀跡に伴うかわらけであり、6はIV期の火災処理層出土のフイゴの羽口である。7の石臼は本文中でも述べたが、土壙西の北壁礫層出土である。残りは細片が多く図化には至っていない。

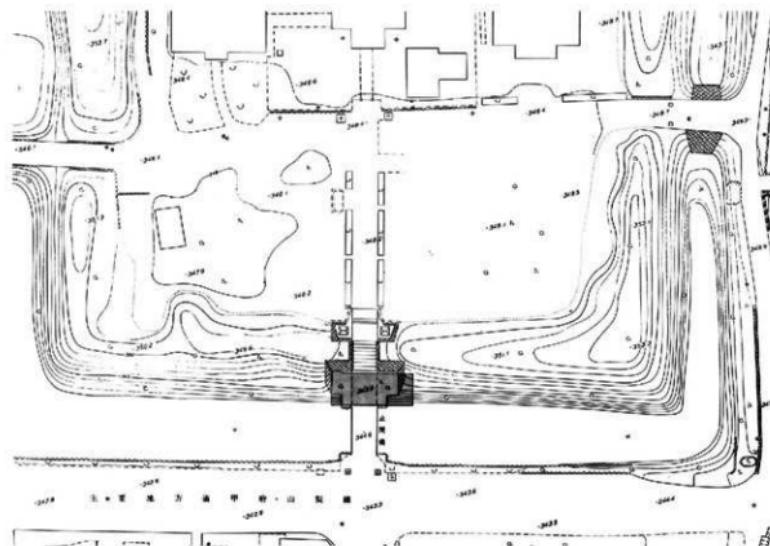


図23 堀跡推定線

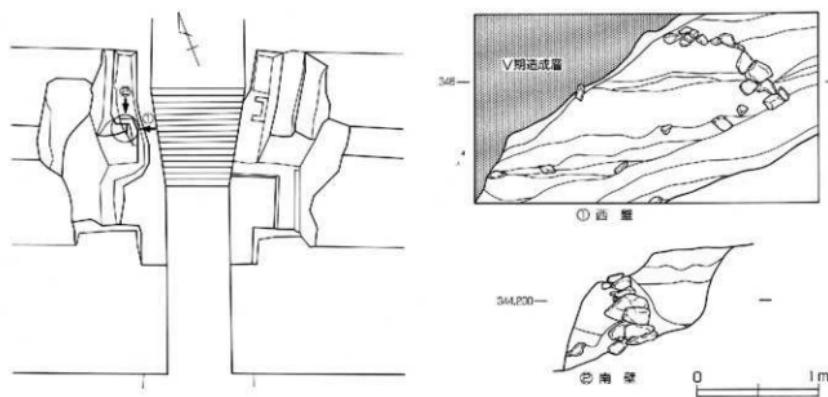


図24 土墨西F区セクション

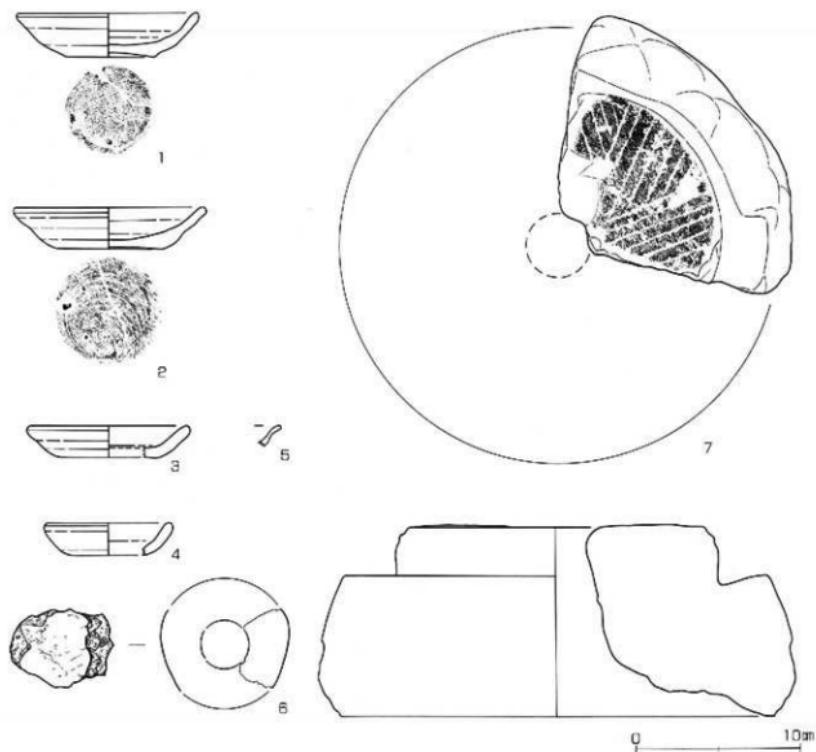


図25 出土遺物

第3節 小括

土壘の変遷については、土壘東において段階別に画期を設定しているが、土壘西の状況も含め改めて整理する。全体的に土壘V期の大改修段階で土壘法面南側下位は削平を受けているため、堀とのセット関係がやや不透明となっている。

I期：基本的に面として使用されていたか不明であるが、面を構築することを意図して造成が加えられている。

II期：地山に盛土を施し平坦面を形成。暗灰黄色土が帯状に広がり、検出幅約7mの堀跡とセットになる。土壘の存在は不明。

III期：推定幅7m、高さ約2m程度の小規模土壘が形成され、犬走り状の硬化面が伴う。硬化面上には砂が敷かれていたが、火災と考えられる二次被熱を受けていた。土壘東のみで明確に確認されるが、土壘西では不確認である。堀はII期の堀を使用。

IV期：III期の土壘を完全に埋め立て推定幅10m、高さ約4.5mの土壘が形成される。構築段階で土壘内石積が築かれる。構築土の中に炭化物と遺物を包含する火災層が存在する。堀はII期の堀を使用。

V期：土壘が現状に近い規模まで大改修される段階で、構築土は疊混じりの黄褐色を主体とする。地山土と考えられる黄褐色土はII期の堀も埋め立てているため、現在の幅16mの堀を掘削した際の採掘土をそのまま土壘の構築土として用いたと考えられる。したがって、現土壘と堀はこの段階で造成されたと考えられる。表面は褐色粘土層で被覆される。

VI期：V期の土壘基底部付近に裏込を伴う3段程度の石垣を築き、僅かに盛土を加える。以上が本調査区で確認された土壘の変遷過程である。土壘西のF区北壁において僅かに集石層の一部が確認されているが、これは平成8年度試掘調査段階で検出された土壘基底部の石垣裏込の可能性があり、中から石臼片が1点出土している。したがって、石垣が築かれた段階も考慮するともう一時期設定できる。

武田氏館跡南土壘は全体として6時期の変遷を経て、現在目にする規模に至っていることが判明した。I・II期の状況はきわめて断片的であるため不明な点が多い。また、小規模ながら土壘の形成が認められたIII期では火災層も検出されている。館は記録上天文2年（1533）と天文12年（1543）の僅か10年で2度焼失している。いずれも早い時期の被災であり、III期の焼失面に該当する可能性も考えられる。

IV期になると本格的な土壘が構築され、この段階の旧表土層は明確に検出されている。同段階の土壘面は主郭部西上土壘セクションでも確認されているため、少なくともIV期には現館のベースは完成されていたと考えられる。

V期の大規模造成は、堀をそれまでの倍の規模に拡幅するとともに、排出された土砂をそのまま土壘に搔き上げ、土壘も倍の規模まで拡大するということが明らかになった。土層の造成状況からみて館外延への拡張であるため武田氏館内の空間自体には大きな影響はなかったものの、隣接していたであろう家臣團屋敷地へ与えた影響は計り知れないと考えられる。このような大規模造成の時期がどの辺りであるかは、考察において検証を試みることとする。

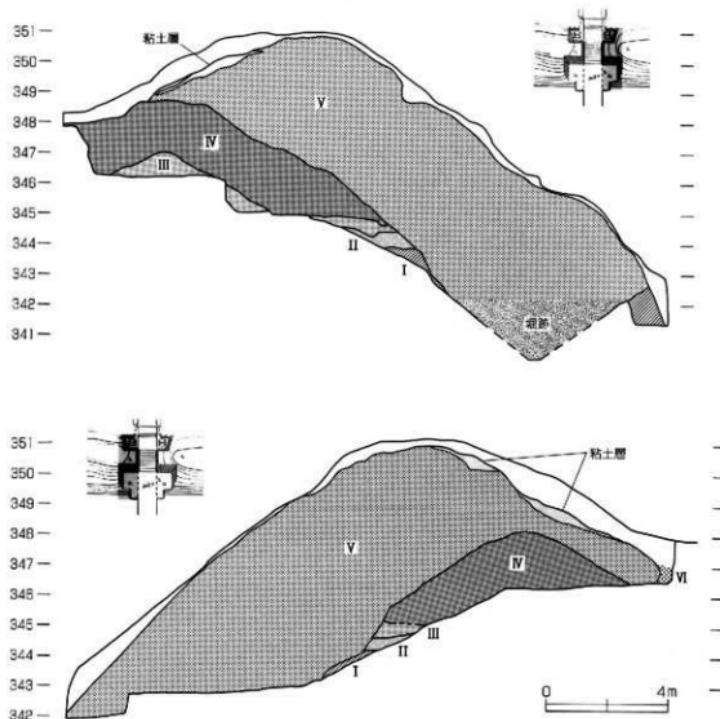


図26 南土塁変遷図

表3 出土遺物観察表

番号	出土位置・述構	器種	法 (口径・底径・器高)	胎 土	色 調	焼成	(単位はセンチメートル・()は推定値)	
							備 考	
1	土塁西36層	かわらけ	10.9・5.3・2.7	長石・石英・雲母 赤色スコリア	明赤褐 5YR 5/6	良		
2	土塁西36層	かわらけ	11.5・6.3・2.5	石英	明赤褐 5YR 5/6	良		
3	土塁西一括	かわらけ	9.4・6.2・1.9	金雲母・長石 赤色スコリア	鈍い橙 7.5YR 7/4	良		
4	土塁西一括	瀬戸・美濃 灰釉皿			胎土/灰白 5Y 7/2	良	大窯1	
5	土塁東裾跡	かわらけ	7.3・4.2・2.0	長石・石英	胎土/浅黄褐 10YR 7/3	良		
6	土塁東一括	フイゴの羽口	内径 3.0・8.0	長石・石英・金雲母	胎土/明赤褐 2.5YR 5/8	良		
7	土塁西45層	石臼	上面径 15.4・下面径 23.0・高さ 11.7	金雲母・長石 赤色スコリア				

第4章 考 察

第1節 武田氏館跡における土壘の構造と変遷

1 武田氏館跡の土壘

武田氏館跡では現在までに土壘の断ち割り調査を6地点で実施している。中曲輪南土壘で2か所、同西土壘1か所、西曲輪北側樹形虎口1か所、味噌曲輪東西土壘で各1か所という状況である。今回の第59次調査以外は、いずれの調査も曲輪内部からの部分的な断ち割りに留まり、全体の様相の把握にまでは至っていない。

主郭部南土壘の調査結果からも明らかなとおり、土壘断面の様相は同じ曲輪内においても地点によって異なり、第59次調査のような近距離においてでさえも異なる堆積状況は存在する。当然土壘の規模が大きくなるほど作業量も比例するため、普請に投入される労働力並びに搬入される土砂の採掘地点や土量、質も異なってくるのは当然であろう。土質に差が生じることは当然であっても、個々の土壘構築技法ではどのような違いが生じているだろうか。以下ではこれまでの調査地点の様相を整理し、構築方法や時期的なものから武田氏館跡の土壘の特徴を抽出する。なお、中曲輪南土壘の特徴については、第3章小括に先述しているためここでは省略する。

(1) 中曲輪西土壘

第44次調査において、南土壘IV期～VI期に相当する土壘面が確認されている。基本的に土壘の変遷や構築方法は、部分的に異なることはあっても基本的に南土壘と同様であり、徐々にかさ上げされて現在の規模に至っている。土壘IV期の旧表土が明確に認められ、土壘V期の粘土層も僅かであるが確認されている。IV期土壘以降に付属する内側の土壘側溝はVI期には埋め戻され、代わりに整地によって石積とそれに伴う側溝を備えた基壇状遺構が設けられている。南土壘VI期で基底部に築かれていた石垣は検出されなかったが、土壘線と直交方向に小礫を積んだ土壘内石積が検出されている。

(2) 西曲輪北側樹形虎口土壘

北側樹形虎口の樹形を形成する内側の虎口両面に構築されている東西石積接続部の土壘の断ち割り調査を実施している。土壘本体には変遷過程を見いだすことはできなかったものの、石積と土壘との年代差は確認された。土壘表面は砂粒を含む粘性の強い褐色粘土層で厚く覆われ、内部は地山土のような礫を含む粗い土を主体としてほぼ水平に盛土し、敲き締めていた。中段平場は削平して造成し、虎口全体は黄褐色系の地山土と黒褐色土を交互に使用して版築状に盛土造成したことが調査で判明している。土壘を構築する地山土は、中段平場造成の際の削平土や堀掘削土など近くで採掘された土を利用していると考えられる。また、東側の土壘基底部からは土壘側溝と考えられる溝跡と石列を検出している。

(3) 味噌曲輪東土壘

土壘規模は現状で高さ約4m、幅約15mである。土壘の最下層には巨大な礫が乱雜に入れられ、隙間は礫や地山土が詰め込まれていた。直上には多量の炭化物と遺物を伴う黒色土が堆積し、それより上層は大小の礫を伴う粗い黒褐色土が盛土されていた。土壘の築き方も周辺の削平土や堀の掘削土を搔き上げてあるためか粗く、一貫して大きな幅で盛土が繰り返し行われている。変遷過程は捉えられず、一度に築かれた土壘と考えられる。

(4) 味噌曲輪西土壘

西土壘は現存で高さ約2m、幅約12mであり、上部は後世大きく削平を受けているものと予測されている。トレンチを入れた地点内において、土壘内から門跡と考えられる礎石と敷石を検出している。検出された門跡は、一時期土壘を断ち割って虎口を設置していたことを物語っているが、何らかの要因で虎口は再び埋め戻されていた。よって、西土壘は北面と南面では土の堆積状況が大きく異なる。北側は東土壘同様堀掘削土や曲輪内の土を搔き上げて構築したためか、1層の幅は大きい。

反対に南面は、北面とは大きく構造が異なり、盛土一層一層がレンズ状に堆積する敲き土壘の工法で築かれている。一層の土量はモック1杯分程度であり、黒褐色や暗褐色、黄褐色など数色の粘土質土を何層にも掘き固めて構築している。粘土質土は若干砂混じりではあるが、比較的粒子の細かなものを選別して使用し、掘き固めて強固なものとしている。この段階の土壘基底部には裏込を伴わない2段程度の石積が設けられている。更に精緻な土壘面を覆う形で、土の搔き上げによって土壘の拡張を図っている。基底部には裏込を伴わない3段の石積と土壘側溝が付設されている。

2 武田氏館跡にみる土壘の構造と変遷

これまで調査した土壘に関しては前述のとおりである。調査では中曲輪以外の土壘は、曲輪内から一部分を断ち割ったものがほとんどで、どこまで全体の構造を表しているか疑問はあるが、現段階で個々の特徴や共通点が明確になったため、土壘の構築法について以下に整理する。

1. 武田氏館跡の土壘は、基本的に搔き上げた土を敲き締めて構築した土壘が多い。
2. 主郭部と西曲輪では、ある時期の土壘表面を被覆する褐色粘土層が存在する。
3. 主郭部内の土壘には、IV期以降土壘内石積が築かれている。
4. ある時期の土壘基底部には規模は違うが、側溝と石積が設置される。ただし、中曲輪では最終期に石垣が伴う。
5. 味噌曲輪西土壘に見られる敲き土壘はこれまでのところ例がない。主郭部南土壘下層で確認されたものも類似しているが、埋め戻しの工程で用いられているもので、堆積した形状は同じであっても敲き土壘として形成されているものではない。

このような点から武田氏館の土壘の多くは、館の造成や堀の掘削時に発生する土を搔き上げて土壘を構築しているものと考えられる。また、西曲輪虎口の土壘は、虎口構造の変遷は窺えるものの、明確な変遷を確認できず、土壘本体への大規模改修は行われていないことが予測され、現段階では西曲輪造成当初の土壘規模を保っていると考えられる。土壘の山表面には褐色粘土層が被覆されているが、これは中曲輪と西曲輪のみに用いられている技法であり、粘土被覆層形成時期に土壘はそれまでの倍近い規模に拡幅されている。西曲輪の土壘に変化がないとすれば、土壘表面への粘土層被覆技法は、西曲輪造成前後に発生していることになり、中曲輪南土壘で検出された主郭部の大規模改修も、西曲輪造成に合わせて同時に実施されたものである可能性が高いと言える。

また、土壘内石積の技法については、事例自体が少なく未だその役割は明らかになっていない。故に様々な機能が想定されるが、基本的には土壘など高い土手を築く際に土留めとして用いられたものと考えられ、主郭部における土壘の構築に多用されていることが推測される。土留めの他にも石積の役割として大きく2つの可能性が考えられる。

まず、土壘内石積自体に言及したものではないが、土壘の具体的な構築方法を示すものとして、西ヶ谷恭弘氏（西ヶ谷1994）により武田氏の隣国、後北条氏が発給した土壘の修

築に関する興味深い文書の紹介がされている。^(註2)文書では北条氏政から岩付城普請に当たっていた松田恵秀へ宛てて、土壘の構築に関する注意を述べているものである。

注進状遂披見候、一土居之事、不及申候へ共、毎度諸人當意之出来
を本ニ致、明日之雜作を忘候間、能々岩付奉行衆ニ可被申付候、
殊小わり共ニ候間、一間之内にて人々之手前各別候者、必合口より
可崩壞、此處奉行之前ニ可有之間、後日無体ニ崩候者、奉行之越度
与被申断、廿五人ニ一間之積にて候者、廿五人ツツ一手中くミニ致様
ニ、せめて有之而可然候、此山炭付奉行ニ可被申付候、其外得心候、
恐々謹言

三月廿四日

氏政（花押）

松田尾張守殿

（『岩槻市史』古文書史料（下）海長守文書）

文書の中で氏政は、土壘の普請を小区分に割り振って構築すること、区割りと区割りの接点の扱い、一区分に投入する人夫数に至るまで細かな指示を与えていた。他国衆太田氏から北条氏直轄となった要衝岩付城の土壘構築に関する為政者の具体的な指示を窺うことのできる貴重な史料である。

文書で指示伝達されたことは、武田氏館においてまったくないとは言えず、検出されている土壘内石積の性格を位置づける上でも一つの可能性を示唆するものである。確かに館の改修には、近隣の郷村単位で人足が徵収されたと推測されるが、郷単位で交代に一定方向から土壘の構築に携わることは非効率的かつ長期の造成に及ぶ。むしろ早期に造成をしようとする場合、召集した人夫を割り当てた人数に応じ、区間を割り振って一斉に着手する方が動員力を活かして短期間に仕上げることが可能であると考えられる。この見知からすると、土壘内石積は普請時の土留めの役割ばかりではなく、土壘普請にあたった人々の工区と接合面の強化の役割を果たしていると見える。しかし、岩付城土壘も調査された訳ではなく、考古学的には今のところ根拠に乏しく、一試案に過ぎない。

もう一つの可能性としては、土壘構築過程における七塁強化と形状維持が想定される。（図32）古墳の墳丘造成に関しては、既にこのような地中石積の調査例が、長野県更埴市の森将軍塚古墳を始め、何例か調査事例が確認されている。森将軍塚古墳の場合は、葺石設置の際に墳丘傾斜の勾配の安定を意図とした、葺石面造成に伴う土留めと位置づけられ、不規則な配置状況から作業単位ではないと考えられている。

戦国期の事例では一乗谷朝倉氏遺跡の上・下城戸に設けられている土壘内からも、同じ構造の上壘内石積が検出されている（図33）。裏込などは一切伴わず、小振りの石を縱方向に土壘と直交する形で比較的乱雑に積み上げている点も武田氏館と同じである。上・下城戸とも石積の配置に規則性はなくランダムに展開しているが、七塁直交の石積ばかりではなく、土壘軸平行で法面に築かれたものも存在する。武田氏館においても同様のものが確認されているため、高上壘を築くために様々な工夫が凝らされていたことが分かる。

近世段階になっても同様の工法は高石垣構築に際して用いられている。甲府城跡大守曲輪の調査においても、地中に埋設することを目的とした面を持たず、裏栗石を伴わない乱雑な積み方の石積（報告書では地中石垣）が6か所検出されている（図34）。小砾を乱雑に積み上げてはいるが、武田氏館跡の土壘から検出された石積に比べると確かに面は整い、しっかりと積み上げている。報告書によると、検出箇所が沢地形であるため、盛土をより強固にするための小V彫と位置づけている。

このような状況から地中に埋設された石積技術は、少なくとも古墳時代には存在し、土壘や堤防のような土手を築くための特殊な工法でもなければ、戦国期特有の技術でもない

図29 西曲輪北側虎口
(「武田氏龍跡IV」より抜粋)

0
4m

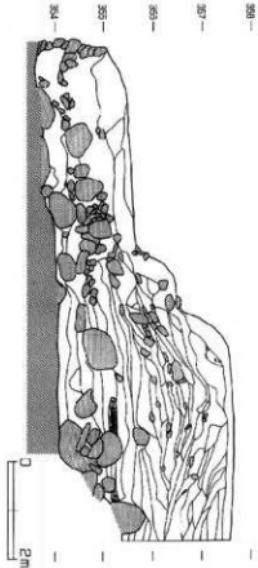


図30 味噌曲輪東土壘
(「武田氏龍跡IV」より抜粋)

図28 中曲輪南土壘
(「武田氏龍跡III」より抜粋)

0
1m

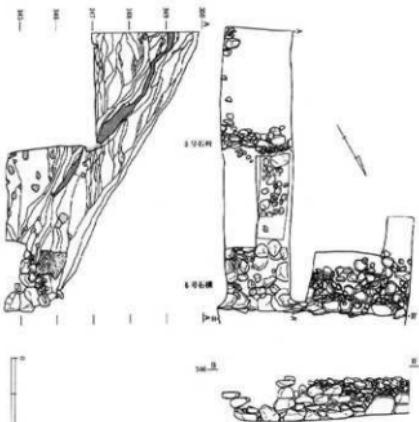
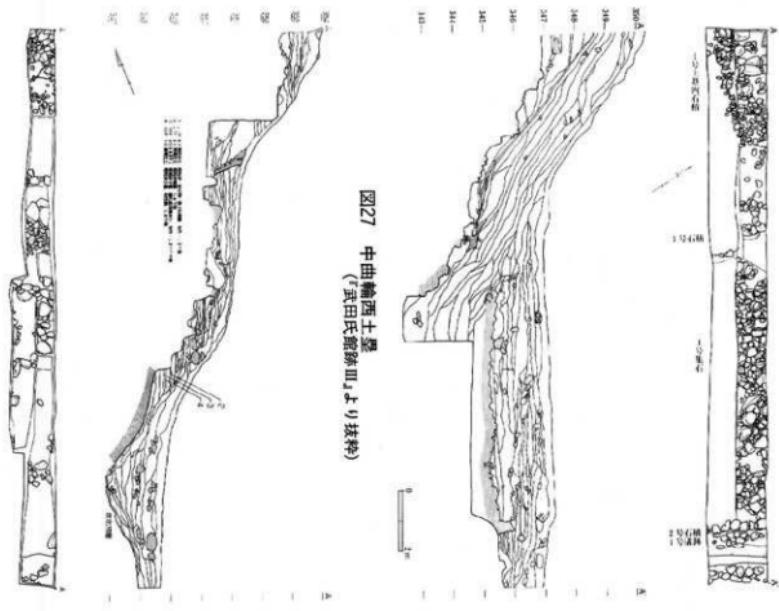


図27 中曲輪西土壘
(「武田氏龍跡III」より抜粋)

0
1m



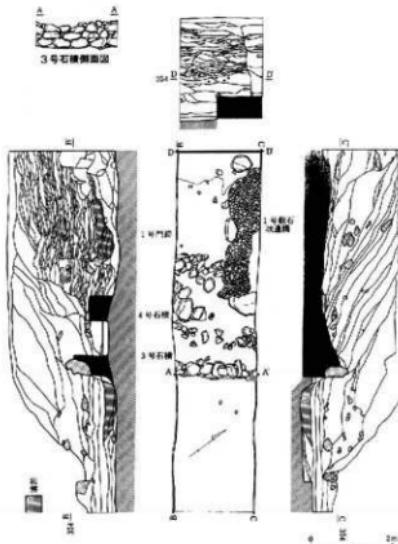


図31 味噌曲輪西土壘
(「武田氏館跡III」より抜粋)

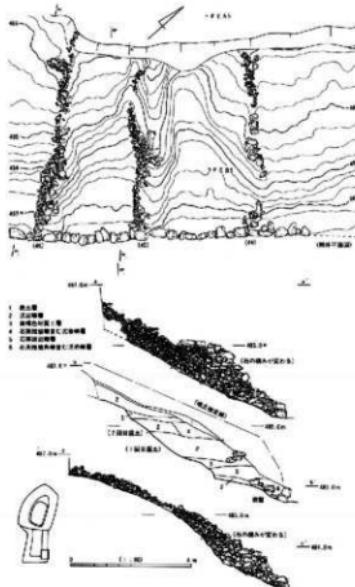


図32 森将軍塚古墳前方部埴丘石積
(「史跡森将軍塚古墳」1992より抜粋)

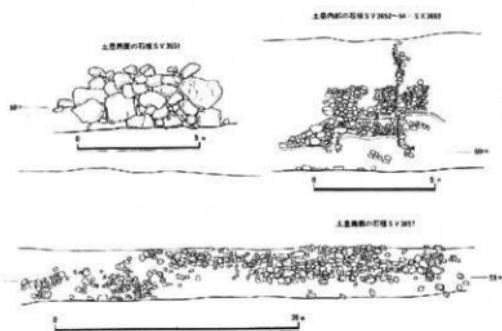


図33 一乗谷朝倉氏遺跡上城戸土壘石積
(「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡」XXより抜粋)

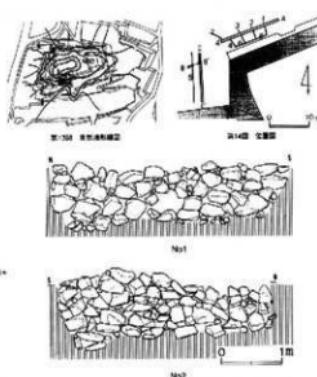


図34 甲府城跡天守曲輪石積
(「甲府城跡」より抜粋)

といえる。したがって、前述の区割り論に立った場合、古墳時代から盛土の構築過程における投資労力の最小単位が具現化されたものとして石積が存在すると考えるとやや疑問が残る。小集団に分かれて区画を割り振られた場合、ある程度の規則性のようなものが見えてても良いのだが、森将军塚古墳の例を見ても、とても規則性があるとは考えがたい。よって、一度の作業で墳丘の盛土を完成できない以上、高い土手を構築する際の造成過程における継ぎ目の補強や墳丘自体の補強、もしくは崩壊を防止し、形状の安定、維持を目的として築かれたものである可能性が強い。

3 まとめ

武田氏の築いた土壘でも曲輪や規模などにより造成方法に特徴があることが明らかになった。特に土壘表面を覆った粘土層の存在は、現実問題として、天日や風雨にさらされる中で、どの程度実用的であったかは検証できなかったものの、明らかに土壘表面の形状維持を意図して被覆されたものと考えられる。時期については、西曲輪十塁の本格的な断ち割りを行っていない現段階では、少なくとも西曲輪増設時以降と考えられるが、今後の調査の課題となつた。

また、土壘内石積に関しては少ない事例の中でみた場合、土壘として低いものに検出例はない。武田氏館や森将軍塚古墳、一乗谷、甲府城跡など時代を問わず、傾斜地形の造成や、より高く、強固な盛土が求められるような大規模な造成過程において、敲き締めの際に土壘構築方向あるいは接続点への減圧を防止し、形状を維持することを目的として必然的に用いられた工法であると考えられるのではないか。おそらく武田氏館規模の土壘の構築には、領国各地から集められた労働力を投資していることから、作業単位が存在していたことは予想されるが、検出された土壘内石積が直接的にその現れであるということを否定するだけの情報は得られなかつた。

(註1) 虎口平坦面を構築するために、地山である黄褐色土と黒褐色を薄く交互に盛上して敲き締めている。寺院などの基壇ほど丁寧かつ整ってはいないが、堆積状況は水平である。

(註2) 西ヶ谷氏は、この文書の内容が示す作業工程や手間の問題から、自身の分類する版築状土壘の構築方法を裏付ける史料として取り上げている。

(註3) 天正4年(1576)に勝頼によって、要害城修築のため帯那郷の住民に動員がかけられている(三枝家文書)。また、真田昌幸による新府城築城に際しても人足の徵用を行っている(長国寺殿御事跡稿)。

第2節 武田氏館跡中曲輪の構造と変遷

1 中曲輪の構造と変遷過程

武田氏館跡に関する調査研究は、地上で確認できる個々の遺構の技術論もしくは絵画資料に基づいた繩張論が主流であった。いずれも考古学的な調査による裏付けを欠いていたため、時期変遷も含め館内部の構造はまったく謎につつまれたままであったが、ようやく平成8年度試掘調査において、中曲輪の構造の一端を確認することができた。武田氏時代と考えられる庭園遺構を伴う生活面を、最終期には石垣などで大規模に造成していることが判明している。同時に館を開む南・西土壘の構造や変遷なども確認され、中曲輪において最もでも2~3時期の遺構確認面を検出している。この段階で曲輪の構造や変遷過程の把握にまで進展しなかった要因として、狭い調査範囲から水平方向並びに垂直方向への見通しが困難であったことが挙げられる。

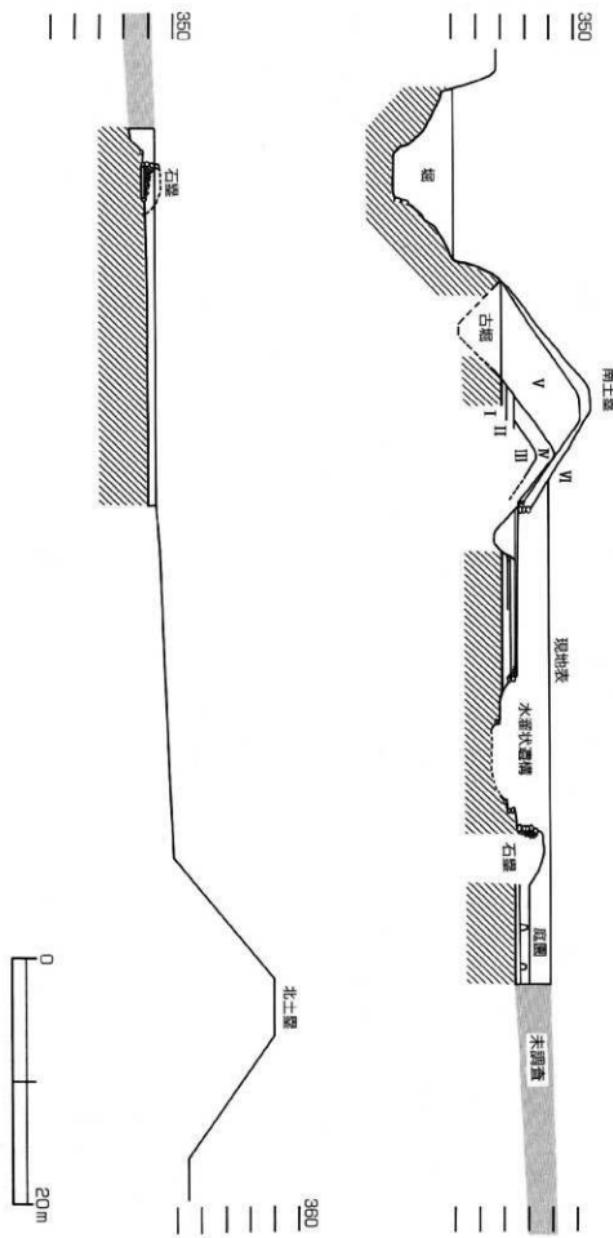


図35 武田氏館跡変遷図

しかし、今回の一連の調査成果により、大まかに主郭部中曲輪の地形と遺構面を南北軸で推定することが可能になった。調査未着手地点については、「史跡武田氏館跡指定地1000分の1現況図」から復元し、図35のような概略図を作成した。あくまで中曲輪方面に限ったものであるため、東曲輪も同じ構造であるとは限らず、今後克服すべき課題が多い。試掘調査の成果も踏まえつつ中曲輪の構造と変遷を整理する。遺構番号が混同する恐れがあるため、便宜的に平成8年度第44次調査を44T S (T S = 武田主郭部)、今回の第56次調査を56T Sとする。(第44次調査は『史跡武田氏館跡III』1997を参照。)

武田氏館跡I期

遺構の確認できる最下位は地山面と考えられ、全体的に標高344m前後で比較的平坦面を構築していると見られる。土基底部付近に入れた調査トレンチ深掘部(サブトレンチC)最下層では、遺構らしい掘り込みが認められる。極めて部分的かつ遺構も稀薄で、面的に把握されていないため、遺構の状況や時期は不明である。南土基断面で観察された土壙I期に対応するものと考えられる。遺構の変遷状況から56T S 1~4号溝が伴うか微妙な段階である。

武田氏館跡II期

標高344.5m付近で整地された生活面が形成され、現段階で土壙は確認されていない。旧表土と考えられる暗灰黄色が帯状に広がり、検出幅7mの堀へ落ち込む。曲輪内では一面整地層が確認されている。明確な遺構は確認されていないため全体の様相は不明であるが、この段階で館として機能を始めたと考えられる。

武田氏館跡III期

標高345m前後の土壙III期に該当し、堀際に犬走りと小規模土壙を伴う生活面である。曲輪内では明確な遺構などは確認されていない。しかし、第44次調査のサブトレンチCにおいて下層から火災層らしい炭化物、焼土粒を含む層が確認されているため、この段階に想定される。

武田氏館跡IV期

土壙IIIを埋め立てた土壙IV期に伴うと考えられる生活面で、標高345m付近で確認されている。曲輪内では44T S 2号敷石状遺構及び44T S 1号庭園跡(立石)などが構築されているが、現段階では次のV期段階の遺構であるか不明であるため、IV期段階に位置づけておく。敷石状遺構は池岸に敷かれた洲浜と考えられ、立石と合わせて一つの庭園空間を形成していたものと考えられる。庭園は北側から景観を楽しんだものと見られ、富士山を借景としていた可能性がある。第56次調査区と44T S 1号庭園跡の間の未調査区内に庭園を鑑賞できる建物の存在が想定される。

また館内の土壙基底部に空堀が確認されているが、土壙とセットで偏溝的な役割を果たしていたと考えられる。曲輪内部の空堀は土壙IV期くらいから伴う遺構と考えられ、このような事例は武田氏館跡西曲輪や谷戸城跡などでも見られる形態である。年代的には16世紀中葉以降に位置づけられようか。

武田氏館跡V期

土壙V期に伴う土壙・堀の大規模造成段階で、曲輪外への拡幅を行っている。曲輪内空間への影響はどの程度の規模であったかは対応する遺構群が明確ではないため、不明であ

る。先述のとおり、庭園造構の帰属時期は不確定であるため、武田氏館跡IV期の造構が存続しつつ、館の規模のみ拡大している可能性も考えられる。土壘の構築技法から天文20年（1551）の西曲輪造成以降に構築された面と想定される。したがって、時期的には第56次1～3号柱穴列が該当すると考えられる。

武田氏館跡VI期

武田氏館最終段階の造構群は、44T S 2号石積を伴う基壇状造構や44T S 1号石壠跡とそれに伴う44T S 1号水溜状造構、及び56T S 1号石壠跡、56T S 1号堀跡である。土壠もV期の土壠基底部に石垣を設けるなどの改修を加えているものの、基本的な土壠規模に大きな変化はない。いずれにしても石壠跡は56T S 1号堀一括資料などから武田氏滅亡後の徳川氏・加藤氏段階であると考えられる。時期不明の天守台とそれに伴う北西隅の造成もこの段階である可能性が高い。年代的に16世紀末に設定される。

2 まとめ

以上のように変遷を土壠の調査成果を基に概観してみたが、館初期段階は依然として不透明であるが、検出された館初期の堀跡の行方は初期の館の規模を考える上で今後の調査に問題を提起する形となった。

また、武田氏館跡は基本的に扇状地上に造営されているため、平面空間を造り出すために削平しないしは盛土造成を施していることが予測された。第56次調査区で造構確認を行った地山面レベルは、347～8m前後であり、土壠基底部や試掘調査で確認した地山レベルは344～5m前後である。本調査区と試掘トレンチを結ぶ延長上は未調査区であり、その間に約3mの標高差が存在する。56T S 1号石壠跡裏込内から武田氏段階の56T S 3号石列が確認されており、石壠も3号石列の区画を踏襲していると考えられることから、石壠と空堀で区画されるこの一帯を境として、武田氏段階で既に現西曲輪のような段構造をもっていたと考えられる。武田氏滅亡後の徳川氏・加藤氏段階で、天守台の建設と石壠や空堀による曲輪内の区画再編など大規模な造成が施され、結果として、主郭部は中曲輪と東曲輪に分割され、石壠の構築によって全体を3段に区画しているものと考えられる。

武田氏館跡の調査から変遷を概観してみたが、土壠の変遷は明確に把握することができたものの、曲輪内の造構検出状況との面的対照が44次調査のサブトレンチCセクションに頼ったところが多く、土壠の変遷と曲輪内の造構面が必ずしも一致しないため、層序順に生活面を設定している。IV期～V期にかけての造構群のうち、特に庭園造構は帰属時期が明確にできなかったため、今後の調査によって、館の変遷過程がより詳細に解明されることを待ちたい。

一参考文献一

1. 「高白斎記」『武田資料集』新人物往来社 1967
2. 磯貝正義ほか編『日本城郭大系8 長野・山梨』新人物往来社 1980
3. 「甲斐国志」第2巻 雄山閣 1982
4. 小野正敏「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究』No.2
日本貿易陶磁研究会 1982
5. 「岩槻市史』古文書史料(下) 岩槻市役所 1983
6. 「特別史跡一乘谷朝倉氏遺跡XVIII」福井県立朝倉氏遺跡資料館 1987
7. 「特別史跡一乘谷朝倉氏遺跡XX」福井県立朝倉氏遺跡資料館 1989
8. 数野雅彦ほか『甲府市史史料編第1巻 原始・古代・中世』甲府市役所 1989
9. 数野雅彦「中世城下町甲府の立地と都市プラン」「帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第3号 1990
10. 「定本山梨県の城」郷土出版社 1991
11. 上田秀夫「16世紀末～17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」「関西近世考古学研究』I 関西近世考古学研究会 1991
12. 小野義信「城館跡等にみられる土器の覚書」「研究紀要』第14号 埼玉県立歴史資料館 1992
13. 「史跡森将軍塚古墳－保存整備事業発掘調査報告書一』更埴市教育委員会 1992
14. 西ヶ谷恭弘「土壌構築法の編年化試験」「城郭史研究』14号 日本城郭史学会 1994
15. 山川 均「漳州窯系陶磁器に関する編年的研究」「平成5(1993)年度大和郡山市文化財年報・紀要』I 大和郡山市教育委員会 1994
16. 森 耕「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通－大阪の資料を中心に－」「ヒストリア』第149号 大阪歴史学会 1995
17. 森村健一「福建省漳州窯系青花・五彩・瑠璃地の編年」「大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要一創立10周年記念論集一』3 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 1995
18. 「甲府城跡』V 山梨県教育委員会・山梨県土木部 1995
19. 「江上館跡V－史跡奥山壮城館遺跡「江上館跡」の環境整備事業に伴う発掘調査報告書一』中条町教育委員会 1997
20. 「山梨県史だより』第14号 山梨県教育委員会県史編さん室 1997
21. 原 真「名胡桃城址に見る土壌築造技術」「東国史論』第13号 群馬考古学研究会 1998
22. 「史跡武田氏館跡III』 甲府市教育委員会 1998
23. 「史跡武田氏館跡IV』 甲府市教育委員会 1999
24. 宮里 学「甲府城の線刻画とその意味－石工の時代的变化の仮説－」「山梨考古学論集 IV』 山梨県考古学協会 1999
25. 志村憲一・望月小枝・佐々木満「武田氏館跡試掘調査報告と今後の課題」「武田氏研究』第20号 武田氏研究会 1999
26. 「新府城跡』 茂崎市教育委員会 1999



図36 年度別調査範囲



写真2 武田氏館跡全景

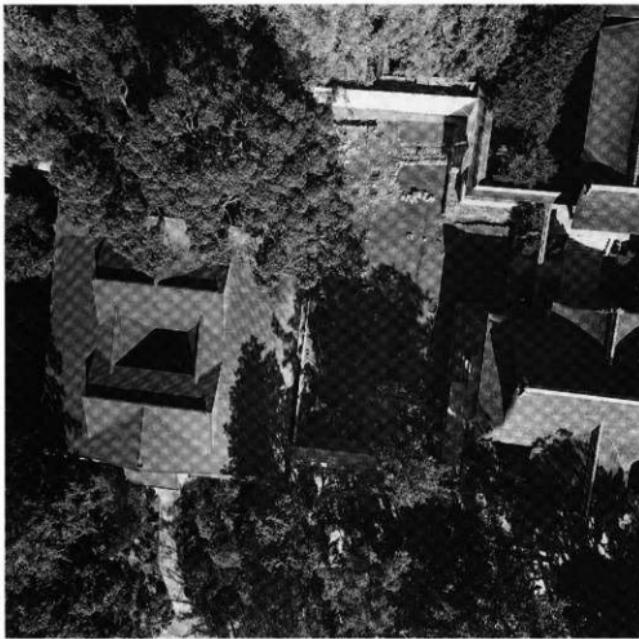


写真3 社務所増築部全景



写真4 調査前

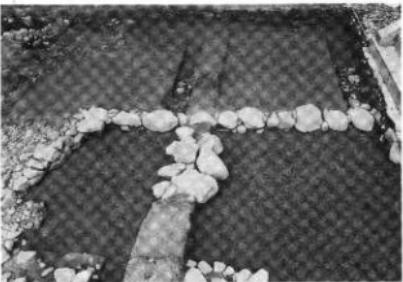


写真5 1号石列・1号石積



写真6 1号石列暗渠



写真7 1号敷石状造構



写真8 調査区全景



写真9 1号掘立柱建物跡



写真10 1号柱穴列



写真11 2号柱穴列

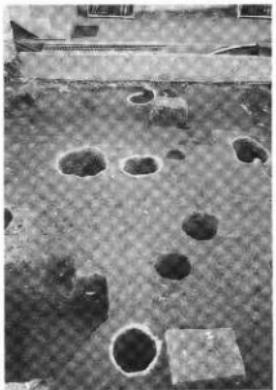


写真12 3号柱穴列



写真13 1号溝跡



写真14 2号溝跡



写真15 4号溝跡



写真16 1号石塁掘削前



写真17 1号石塁跡・1号堀跡



写真18 1号石塁跡



写真19 1号堀跡セクション

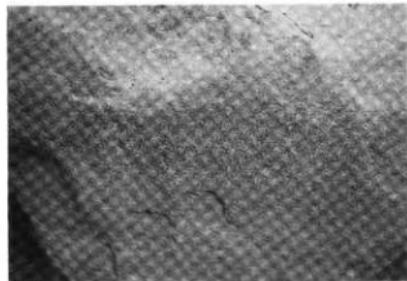


写真20 1号石塁跡線刻



写真21 3号石列



写真22 3号石列

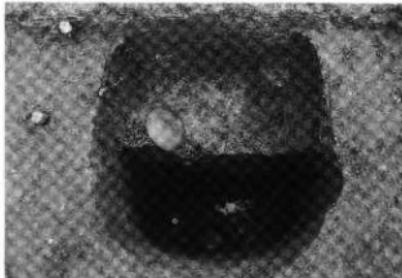


写真24 Pit25遺物出土状況

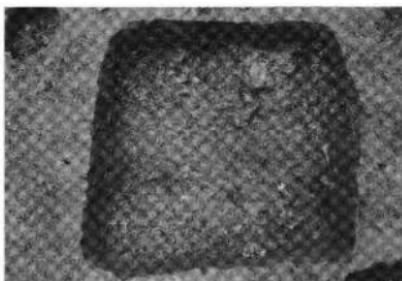


写真25 1号土坑



写真23 1号堀跡遺物出土状況

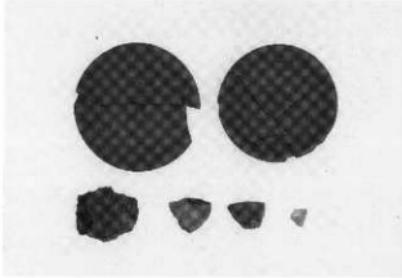


写真26 南土壘出土遺物

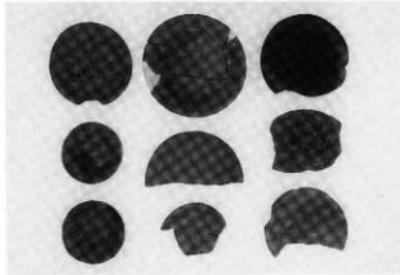


写真27 かわらけ①

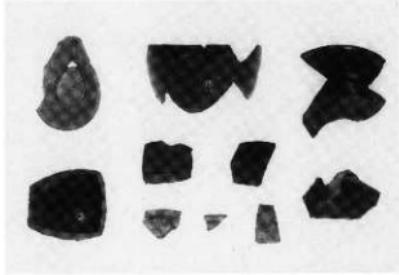


写真30 国産陶器

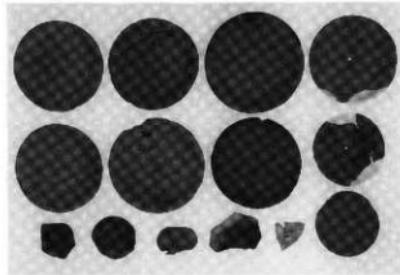


写真28 かわらけ②

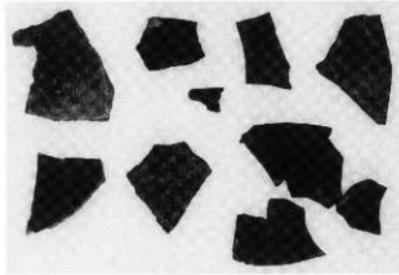


写真31 国産・輸入陶器

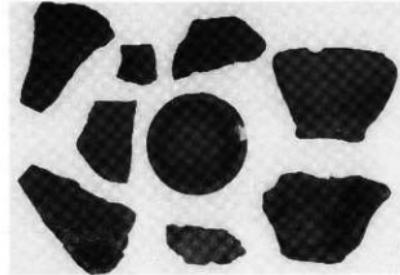


写真29 その他土器類

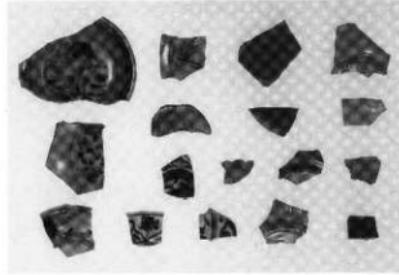


写真32 輸入磁器



写真33 調査区全景

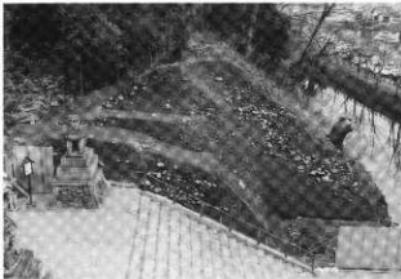


写真34 土壘東全景

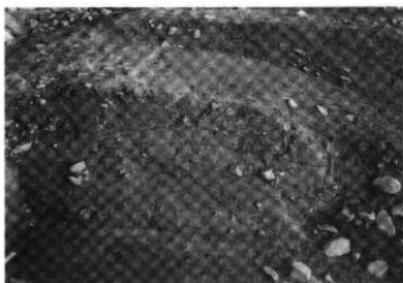


写真35 土壘東B区セクション



写真36 土壘東B区下位・C区セクション



写真37 土壘東C区・D区セクション

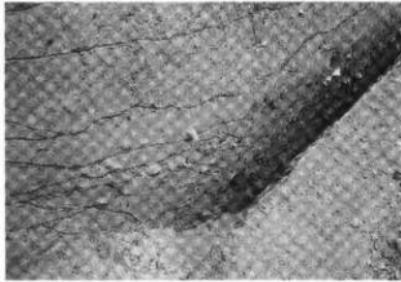


写真38 土壘東堀跡



写真39 土墨西全景

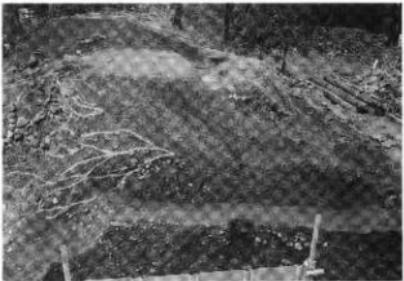


写真40 土墨西F区セクション



写真41 土墨西G区セクション



写真42 土墨西H区下位セクション



写真43 土墨西石積



写真44 土墨西遺物出土状況



図37 第56次調査全体図

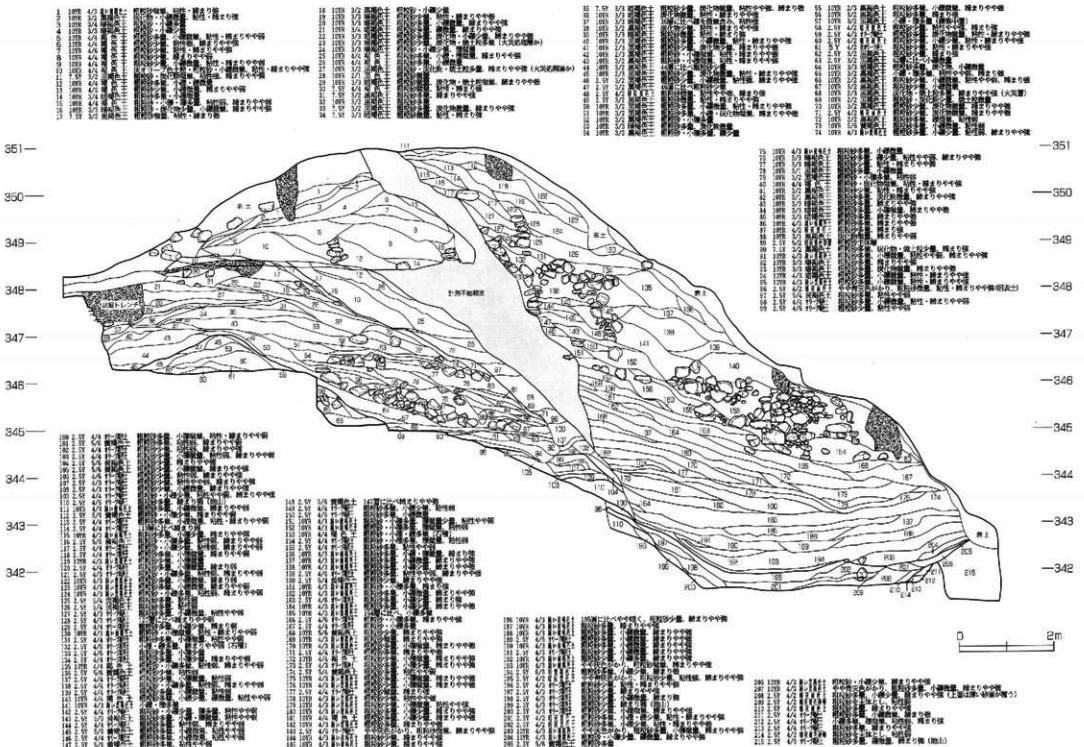


図38 土壌東セクション

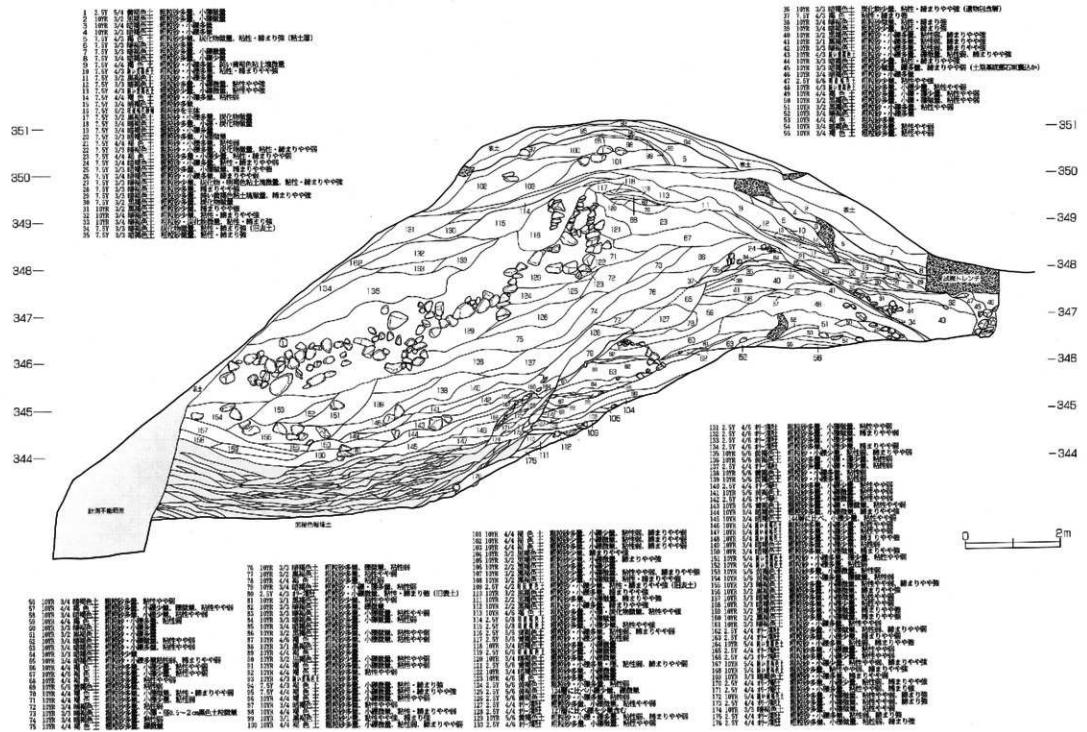


図39 土壌西セクション

報告書抄録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと						
書名	史跡武田氏館跡						
副書名	武田神社社務所増築・参道石垣改修に伴う主郭部調査						
卷次	VI						
シリーズ名	甲府市文化財調査報告						
シリーズ番号	10						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話 055(223)7324						
発行年月日	平成12年3月30日						
所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
武田氏館跡	山梨県甲府市 古府中町	19201	01110	35° 40' 58"	138° 34' 50"	19980727 ~ 19990120	現状変更に伴う発掘調査 820m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
武田氏館跡	城館跡	中世	水路・溝・土坑 ・建物跡・柱穴 ・土壘・石垣	かわらけ・瀬戸美濃・青 磁・白磁・青花・石製品		館の6時期の 変遷を確認	

甲府市文化財調査報告10

史跡 武田氏館跡 VI

武田神社社務所増築・参道石垣改修に伴う主郭部調査

平成12年3月30日

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号

TEL 055 (223) 7324

FAX 055 (226) 4889

印刷 佛内田印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

